

若宮 45次調査

古道 14次調査

若宮

-45次調査-

古道

-14次調査-

あ い さ つ

日高市は埼玉県南西部に位置し、埼玉県を代表する清流高麗川が流れ、緑も多く自然に恵まれた住環境にあります。文化財につきましても、先人が長い年月をかけて築きあげた歴史や文化が数多くあります。とくに「続日本紀」に記述されている靈亀二年、西暦716年の高麗郡設置は当市の大きな出来事であり、平成28年には建郡1300年を迎ました。

しかし近年、土地区画整理事業に伴う市街化の整備や首都圏中央連絡自動車道の開通など急激に都市化が進みつつあり、先人の生活や文化を伝える埋蔵文化財の保護、保存が急務となっております。当市では開発に伴って緊急発掘調査を行い、記録保存の処置を講じております。

今回刊行する報告書は、平成25年度に調査しました若宮遺跡、平成26年度に調査しました古道遺跡の成果をまとめたものです。

本書が郷土資料、学術資料として広く活用され、郷土愛そして文化財保護の向上に役立てば幸いです。

発掘調査そして報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました文化庁、埼玉県教育委員会をはじめ、多くの市民の皆さま、発掘調査に従事いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

日高市教育委員会
教育長 中村 一夫

例　　言

- 1 本書は埼玉県日高市大字女影に所在する若宮遺跡（No132遺跡）45次調査、日高市大字高萩に所在する古道遺跡（No123遺跡）14次調査の調査報告書である。
- 2 若宮遺跡45次調査、古道遺跡14次調査の発掘調査は、市の単費で日高市教育委員会が実施した。
- 3 埋蔵文化財発掘調査の通知の発番は以下のとおりである。
若宮遺跡45次調査 平成25年4月19日付日教生発第38号
古道遺跡14次調査 平成26年4月30日付日教生発第46号
- 4 発掘調査は若宮遺跡を早川修司が、古道遺跡を松本尚也が担当した。
- 5 挿図図版の縮尺は、それぞれのキャッシュionに明記した。
- 6 握図中の遺物番号と写真図版番号は一致する。
- 7 拓本、トレース、遺物実測は松本尚也、早川修司、新井敏子、勝山敏江、渡辺敬子があたった。図版作成、遺物写真撮影は松本尚也、早川修司が行った。
- 8 本書の編集は松本尚也が行い、執筆は第2章が早川修司、その他は松本尚也が担当した。
- 9 石質の鑑定は、埼玉県立川越南高等学校教諭田口聰史氏にお願いした。

10 調査組織

調査主体者　日高市教育委員会

教育長	中村一夫	
	佐藤信弘	平成25、26年度
教育部長	野村泰平	
	新井義雄	平成25、26年度
生涯学習課長	関根俊介	
	堀口　敬	平成25、26年度
生涯学習課副参事	中平　薰	
生涯学習課文化財担当主幹	中平　薰	平成25年度
生涯学習課文化財担当主査	松本尚也	
生涯学習課文化財担当主査	早川修司	
調査担当者	生涯学習課副参事	中平　薰
	生涯学習課文化財担当主査	松本尚也
	生涯学習課文化財担当主査	早川修司

11 発掘調査及び資料整理作業員

若宮遺跡45次調査

荒木田由利　岡野芳美　勝山敏江　倉本信代　小嶋信子　土屋八重子　本間博子　森稔子

古道遺跡14次調査

長部孝子　田中ひさ子　森稔子

資料整理

新井敏子　岡野芳美　長部孝子　勝山敏江　倉本信代　田中ひさ子　土肥敏子　渡辺敬子

目 次

あいさつ

例 言

第1章 遺跡の立地と環境.....	1
第2章 若宮遺跡 -45次調査-	3
1 : 立地と概要.....	3
2 : 調査経過.....	4
3 : 21号住居址.....	4
4 : 22号住居址.....	12
5 : 23号住居址.....	21
6 : 24号住居址.....	24
7 : 25号住居址.....	27
8 : 若宮遺跡45次調査について.....	33
第3章 古道遺跡 -14次調査-	34
1 : 立地と概要.....	34
2 : 調査経過.....	36
3 : 造構外出土遺物.....	36
4 : 23号住居址.....	38
5 : 1号土壙.....	43

挿 図 目 次

1	遺跡位置図	2
2	若宮遺跡周辺地形図	3
3	若宮遺跡45次調査区全測図	4
4	21~23号住居址（1）	5
5	21~23号住居址（2）	6
6	21号住居址	7
7	21号住居址カマド	8
8	21号住居址出土遺物（1）	9
9	21号住居址出土遺物（2）	10
10	21号住居址出土遺物（3）	11
11	22号住居址	13
12	22号住居址カマド	14
13	22号住居址出土遺物（1）	16
14	22号住居址出土遺物（2）	17
15	22号住居址出土遺物（3）	18
16	22号住居址出土遺物（4）	19
17	22号住居址出土遺物（5）	20
18	23号住居址	21
19	23号住居址カマド	22
20	23号住居址出土遺物（1）	23
21	23号住居址出土遺物（2）	24
22	24、25号住居址	25
23	24号住居址カマド	26
24	24号住居址出土遺物	27
25	25号住居址（1）	28
26	25号住居址 1号カマド	29
27	25号住居址 2号カマド	30
28	25号住居址（2） 3号カマド	31
29	25号住居址出土遺物	32
30	古道遺跡周辺地形図	34
31	古道遺跡14次調査区全測図	35
32	遺構外出土遺物	36
33	23号住居址 1号土壤	37
34	23号住居址 1号カマド	39
35	23号住居址 2号カマド	39
36	23号住居址 3号カマド	39
37	23号住居址出土遺物（1）	40
38	23号住居址出土遺物（2）	42
39	1号土壤出土遺物	42

図版目次

- 図版 1 若宮遺跡45次調査
調査区全景（南から）
21号住居址
22号住居址遺物出土状況（1）
22号住居址
- 調査区全景（東から）
21号住居址カマド
22号住居址遺物出土状況（2）
22号住居址貼床下
- 図版 2 若宮遺跡45次調査
22号住居址カマド
23号住居址
23号住居址カマド遺物出土状況（2）
24号住居址
- 23号住居址炭化材出土状況
23号住居址カマド遺物出土状況（1）
23号住居址カマド
24号住居址カマド
- 図版 3 若宮遺跡45次調査
25号住居址（1）
25号住居址 1号カマド
25号住居址 2号カマド
25号住居址 3号カマド
- 25号住居址 1号カマド疊出土状況
25号住居址（2）
25号住居址（3）
25号住居址貼床下
- 図版 4 若宮遺跡45次調査
21号住居址出土遺物
22号住居址出土遺物（1）
- 図版 5 若宮遺跡45次調査
22号住居址出土遺物（2）
23号住居址出土遺物（1）
- 図版 6 若宮遺跡45次調査
23号住居址出土遺物（2）
24号住居址出土遺物
25号住居址出土遺物
- 図版 7 古道遺跡14次調査
23号住居址遺物出土状況（1）
23号住居址
23号住居址 2号カマド
1号土壤
- 23号住居址出土遺物状況（2）
23号住居址 1号カマド
23号住居址 3号カマド
14次調査区全景
- 図版 8 古道遺跡14次調査
23号住居址出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

日高市は埼玉県南西部の山地と丘陵地の境界に位置し、首都圏50kmにあたる。市の西部には外秩父山地の東縁が広がり、山地の縁辺部に八王子構造線が南北に走っている。外秩父山地から北に毛呂山丘陵、南に高麗丘陵が舌状に東へ張り出し、市の南北はこの2つの丘陵により画されている。奥武藏正丸峠付近の山々を源とする高麗川は市の西部から北辺を小さな蛇行を繰り返しながら東流し、扇状の沖積地を形成している。高麗川から東方の右岸を坂戸台地と呼び、市の平坦部はこの坂戸台地に位置している。坂戸台地は市西部の高麗本郷付近を扇頂とする古い扇状地形で、高麗丘陵を源とする小畔川をはじめとした多くの小河川により小支谷が形成されている。

市西部の高麗地区は、高麗川が大きく蛇行している巾着田をはじめ、山地は奥武藏自然公園に指定されており自然が多く残っている地域である。市中央部の高麗川地区は高麗川駅西口土地区画整理事業により都市化が進み、市東部の高萩地区でも、武藏高萩駅北土地区画整理事業、寺脇地区土地区画整理事業や首都圏中央連絡自動車道の開通により景観が大きく様変わりした。

当市の遺跡立地を考えると、高麗川や幾筋もの小畔川、そして南小畔川の流れに沿って遺跡が連なっている。各小畔川流域の遺跡の密度は濃く、縄文時代の遺跡も数多く所在する。遺跡は概ね河川近くの台地上に立地し、水の確保が容易な場所に築いている。市内には沖積地の発達した地域が少ないためか弥生時代の遺跡は確認されていない。古墳時代の遺跡も僅かに2ヶ所確認されているだけで、まったくの空白期といえる。このことは当市の歴史の大きな特徴である。奈良時代になると、靈亀二年（716年）に日高市、飯能市を中心とした地域に高麗郡が建郡され、それ以降集落は爆発的に増え平安時代に興隆期を迎える。

若宮遺跡（1）、古道遺跡（2）は小畔川と下小畔川に挟まれた台地上に位置している。高麗丘陵を源とする小畔川左岸には、稻荷遺跡（3）（4）、大黒ヶ谷戸遺跡（5）、道光林遺跡（6）、中王神遺跡（7）、王神遺跡（8）、拾石遺跡（9）、新宿遺跡（10）が所在している。稻荷遺跡では8世紀後半から9世紀中葉の住居址が3軒調査されている。道光林遺跡では8世紀前半の住居址3軒が調査され、内1軒の住居址は南壁に張り出しを持っている。中王神遺跡でも盛土保存対応で詳細な時期は不明であるが、奈良・平安時代の住居址を2軒検出している。王神遺跡では8世紀中葉から9世紀前半の住居址8軒、井戸址3基、道路遺構1条、水路遺構1条、東西5間×南北4間で中柱を持つ建物跡1棟の調査を行った。住居址覆土からは鳥形硯の蓋の一部が出土した。関東地方での出土例はなく、近隣では長野県塩尻市菖蒲沢窓跡から出土している。鳥形硯の多くは平城京からの出土である。拾石遺跡は8世紀中葉から9世紀後半の住居址46軒、井戸址14基、道路遺構1条、水路遺構2条、掘立柱建物跡6棟を調査し、耳皿、石製巡方、石製丸薬、漆紙などの特殊な遺物や、「厨」、「家長」、「南家」、「貞」、「坏」、「田」、「万」などの墨書き土器も出土している。道路遺構、水路遺構は王神遺跡と同一の遺構である。新宿遺跡では8世紀中葉から9世紀後半の住居址11軒を検出している。出土した「山本」と書かれた墨書き土器は、貞觀十四年（872年）の『貞觀寺田地目録帳』（仁和寺文書）に出てくる武藏国高麗郡山本荘との関連資料として注目される。

小畔川右岸には堀ノ内遺跡（11）が所在している。若宮遺跡は下小畔川左岸に位置している。若宮遺跡は遺跡の中を伝承鎌倉街道が南北に貫き、8世紀前半に建立されたとされる女影庵寺を含んでいる。

この他に下小畔川左岸には小河原遺跡（17）、上敷遺跡（18）（19）、姥ヶ原遺跡（20）（21）、姥田遺跡（22）が、右岸には金子ヶ谷戸遺跡（23）、上ノ条遺跡（25）（26）（27）が所在する。

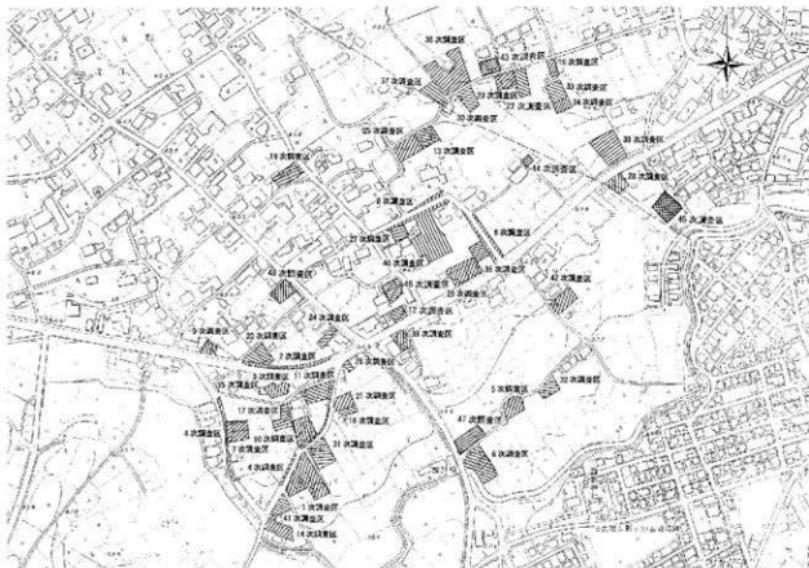


第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

第1図掲載道路一覧

- 1 若宮遺跡（奈良・平安） 2 古道遺跡（奈良・平安） 3、4 楠荷遺跡（縄文中期・奈良・平安） 5 大黒ヶ谷戸遺跡（奈良・平安）
6 道光林遺跡（奈良・平安） 7 中王神遺跡（奈良・平安） 8 王神遺跡（奈良・平安） 9 拾石遺跡（縄文早期・奈良・平安） 10 新宿遺跡（奈良・平安） 11 堀ノ内遺跡（縄文中期・奈良・平安・中世） 12 白幡遺跡（縄文中期） 13 大木下遺跡（縄文） 14 宿東遺跡（縄文・後期） 15 宮ノ前遺跡（縄文） 16 内村遺跡（縄文・後期） 17 小河原遺跡（奈良・平安） 18、19 上敷遺跡（奈良・平安）
20、21 起ヶ原遺跡（平安） 22 姥田遺跡（平安） 23 金子ヶ谷戸遺跡（縄文・平安） 24 昔田遺跡（縄文） 25、26、27 上ノ条遺跡（縄文・平安・中世） 28 女影ヶ原古戰場跡 29 諏訪山遺跡（縄文・奈良・平安） 30 寺脇遺跡（縄文中・後期） 31 谷津前遺跡（縄文中・後期・平安） 32 北中沢遺跡（縄文中期） 33 東方遺跡（縄文・平安） 34 開場遺跡（縄文・平安）

第2章 若宮遺跡 -45次調査-



第2図 若宮遺跡周辺地形図 (1/5,000)

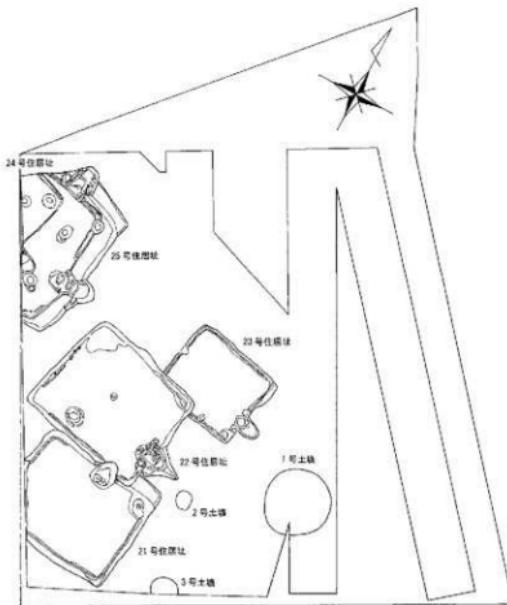
1：立地と概要

若宮遺跡は、市の中央を蛇行しながら東流する小畔川と下小畔川に挟まれた東西に長く伸びる舌状を呈す台地上の標高62～65m付近に位置する。遺跡の南には、下小畔川によって開析された幅の狭い谷津田が形成されている。

昭和55年以降、延べ48次の調査で、奈良・平安時代の住居址25軒（内2軒は盛土保存）、掘立柱建物跡3棟、井戸址3基（内1基は盛土保存）、溝2条、大型土壙3基等多数の遺構を検出している。その分布を見ると、遺跡西側の平坦面に集中している。

本遺跡の特徴は、8世紀前半の高麗郡設置に伴い、郡寺として創建されたと推定される女影廐寺が含まれることである。その存在を窺わせる資料が、遺跡の西側で見つかっている。第3次調査では、大形の土壙1基と断面がV字形を呈する溝1条が検出され、土壙からは軒丸瓦、軒平瓦をはじめとする各種の瓦、「高」の陽刻の押印がある平瓦の他、瓦塔、塼や「寺」と墨書きされた須恵器が出土している。18次調査においても、土壙から「寺」と墨書きされた須恵器が出土している。

しかしながら、これまでの調査では寺域や伽藍配置は明らかになっておらず、集落の全体像についても不明な部分が多い。



第3図 若宮遺跡45次調査区全測図 (1/200)

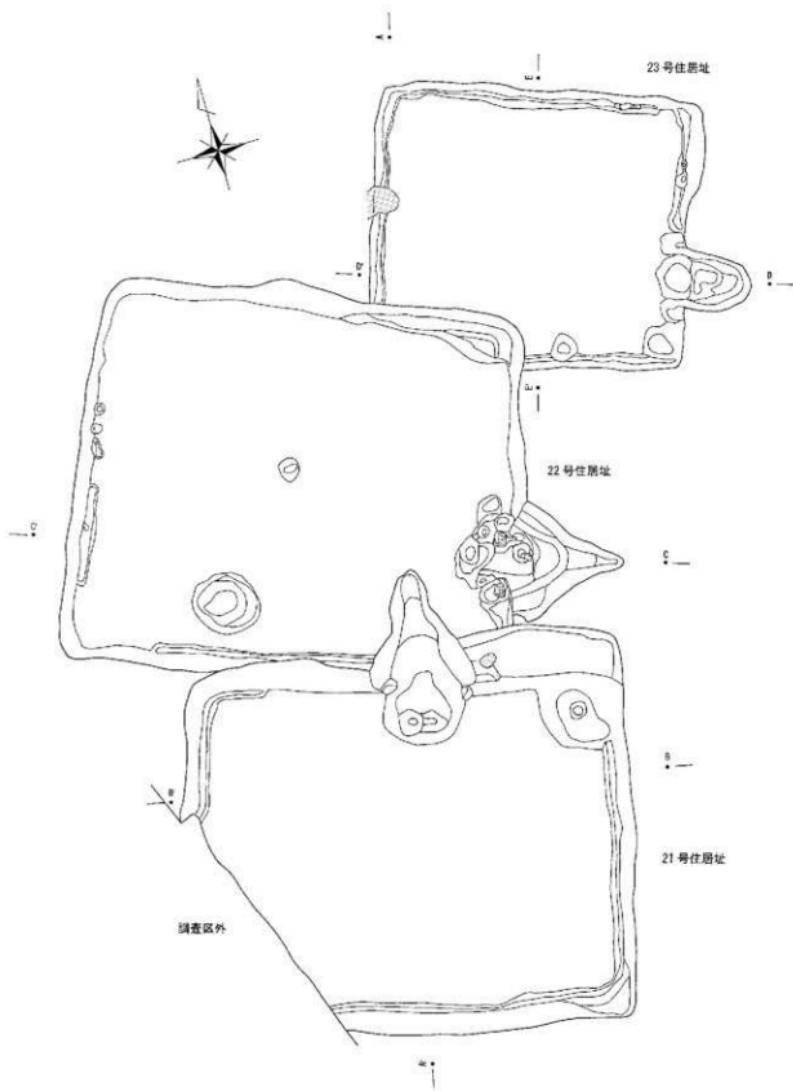
2 : 調査経過

調査を実施した地点は畑で、所在地は埼玉県日高市大字高萩字中丸561-3である。試掘調査は平成25年3月13日から15日まで実施した。調査区の南北方向に幅2mのトレンチを4本設定し、重機を用いて耕作土を除去し、遺構確認面である黄褐色ローム層及び黒色土層上面まで掘り下げた。遺構確認を行った結果、調査区北西側から南側にかけて住居址5軒、土壙3基を検出した。

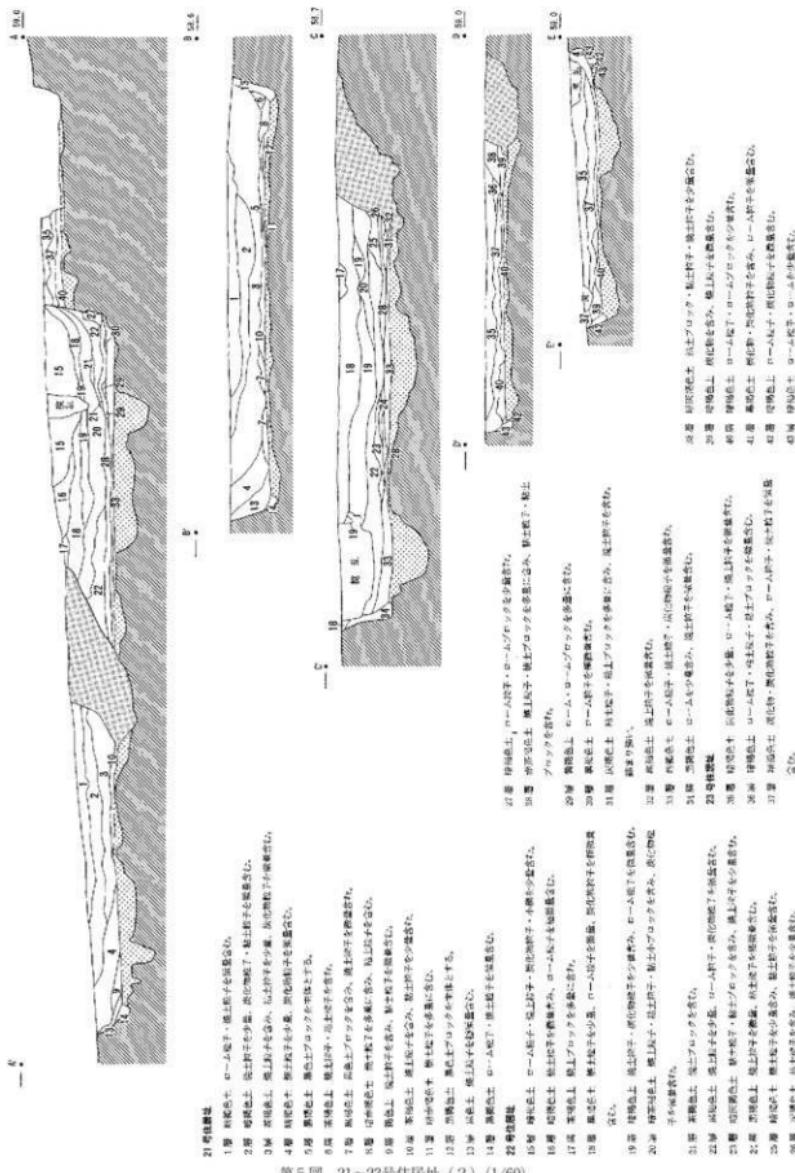
検出した遺構の取り扱いについて事業者と協議を行った結果、建築部分に該当する住居址5軒を発掘調査し、土壙3基は盛土保存で対応することになった。

3 : 21号住居址

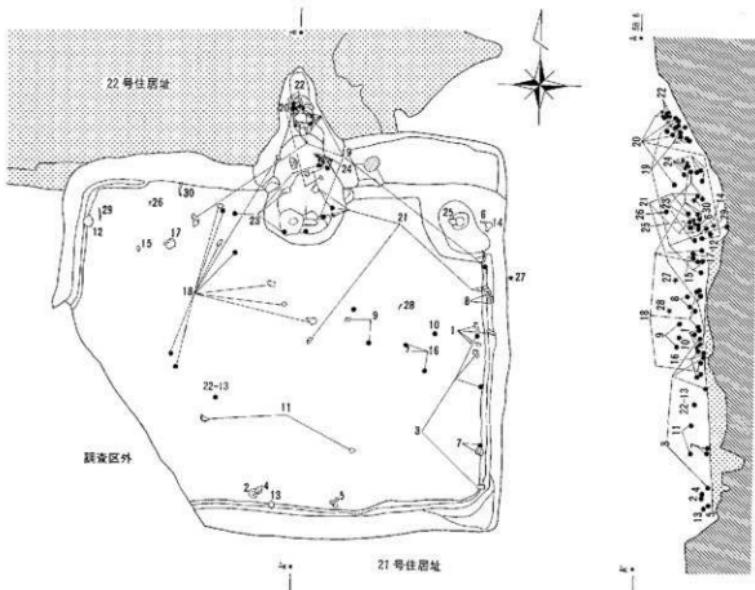
本住居址は、調査区南側に位置し、一部は調査区外へと続く。北側で22号住居址と重複し、新旧関係は本住居址が新しい。平面プランは長方形を呈し、南北4.7m、東西5.6mをはかる。主軸方位はN-1°-Wを示す。壁高は30~53cmで、傾斜をもって立ち上がる。周溝は、貯蔵穴から北西コーナーまでの壁沿いに巡り、幅5~20cm、深さ3~10cmである。床面は、住居中央部からカマド、壁に向かって僅かに傾斜が見られる。また、中央部からカマド前にかけては、硬く踏みしめられている。カマドは北壁中央に構築される。カマドの右側には、北東コーナーまで棚状施設が設けられ、幅252cm、奥行き60cm、床面からの高さ40cmをはかる。北東コーナーに接して貯蔵穴を持つ。長軸90cm、短軸80cm、深さ26cmをはかる。貼床下は、



第4図 21~23号住居址(1) (1/60)



第5図 21～23号住居地 (2) (1/60)



第6図 21号住居址 (1/60)

3~14cm掘り下がり、北壁及び南壁に沿う部分がやや深くなる。また、南壁中央から内側へ70cmの箇所に径20~30cm、深さ15~16cm、100cmに径30~35cm、深さ32~34cmをはかる2本一組のピットを検出している。

カマド

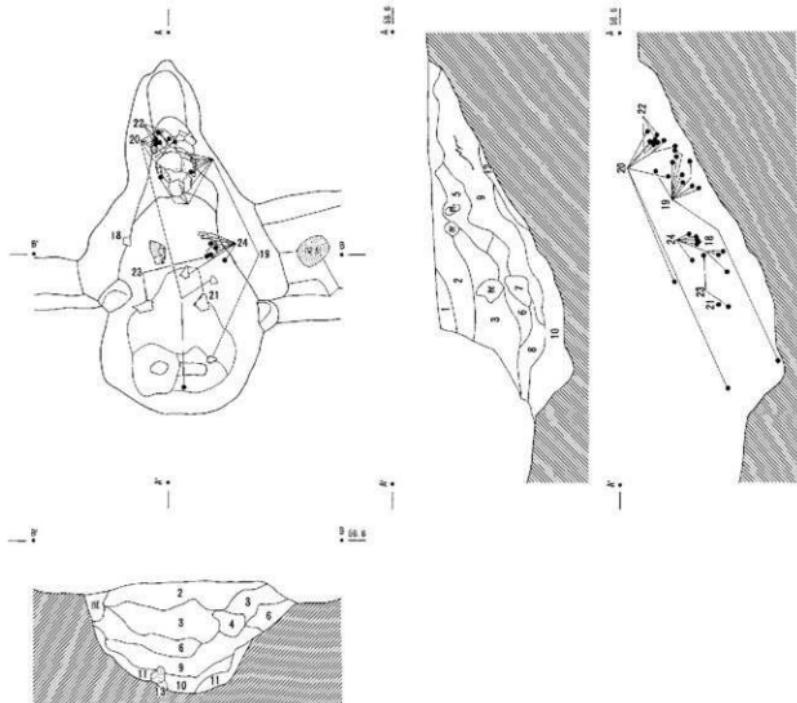
カマドは北壁中央に構築され、平面プランはV字形を呈する。壁から144cm掘り込まれ、幅133cm、奥行き216cmをはかる。火床部は床面から25cm掘り込まれ、幅68cm、奥行き76cmである。火床部から煙道に向かって、緩やかな傾斜で立ち上がり、先端部へ続く。火床部から煙道部に立ち上がる箇所で、支脚の可能性を持つ礫が出土している。

出土遺物

29は貼床下からの出土である。

蓋形土器（第8図1・図版4-1）

1は器内外面にロクロ水挽き整形が施される。天井部器外面には、回転糸切りが行われる。天井部は僅かに弯曲し、垂直に屈曲する口縁部に続く。口径15.9cm、天井部径6.8cm、器高3.5cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。



21号居住カマド

- 1層 灰褐色土 ルーム粒子・粘土粒子を微量含む。
- 2層 灰褐色土 粘土粒子を少量、炭化物粒子・粘土粒子を微量含む。
- 3層 黄褐色土 粘土粒子を含み、粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
- 4層 明赤褐色土 粘土粒子・粘土ブロックを主張とする。
- 5層 暗赤褐色土 粘土粒子を多量、粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
- 6層 深褐色土 粘土粒子・粘土ブロックを多量に含み、粘土粒子を微量含む。

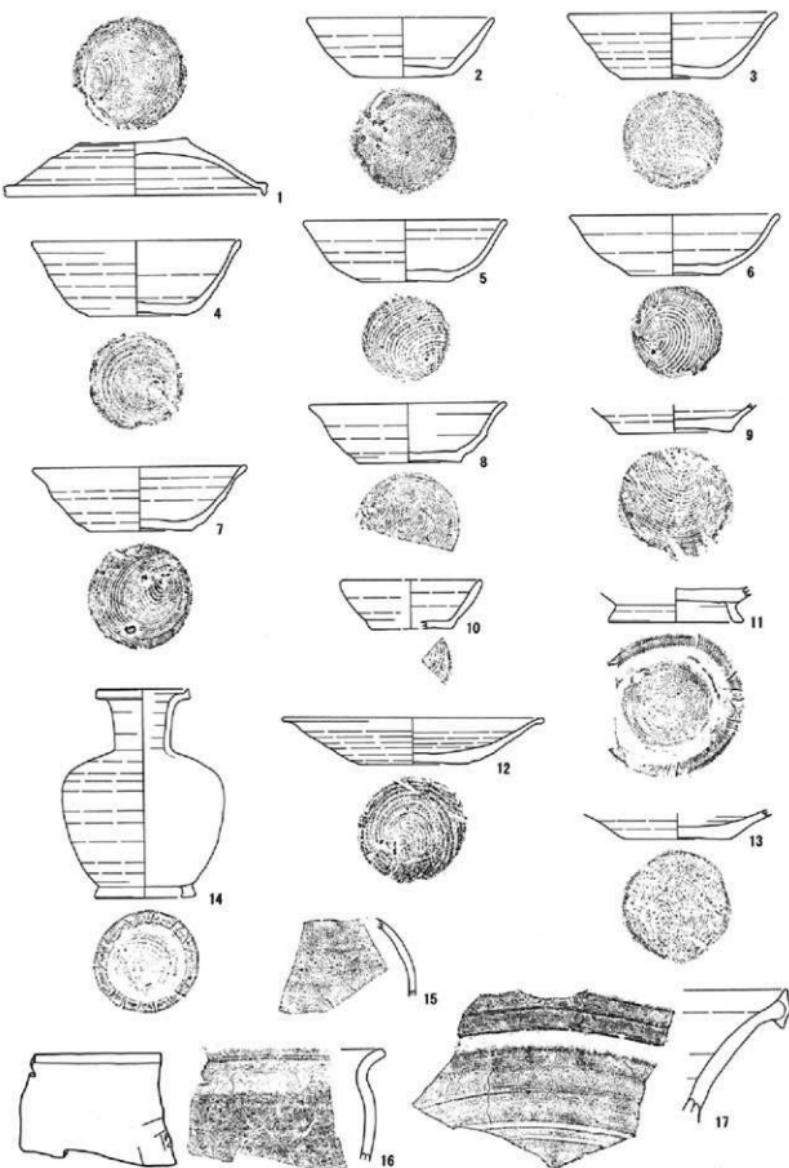
7層 灰褐色土 粘土を主体とする。

- 8層 灰褐色土 粘土粒子を含み、粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
- 9層 灰褐色土 粘土粒子・粘土ブロックを多量に含み、粘土粒子を含む。
- 10層 灰褐色土 粘土粒子・粘土块子・粘土ブロックを含み、炭化物粒子を微量含む。
- 11層 灰褐色土 粘土粒子を少量含む。
- 12層 灰褐色土 粘土粒子を含む。
- 13層 灰褐色土 粘土を主体とする。

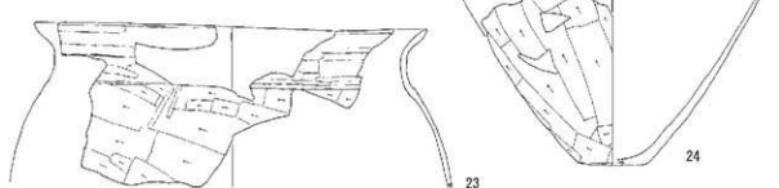
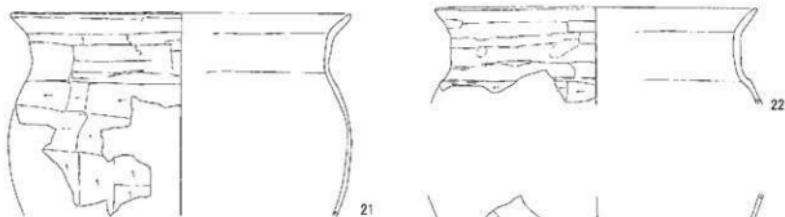
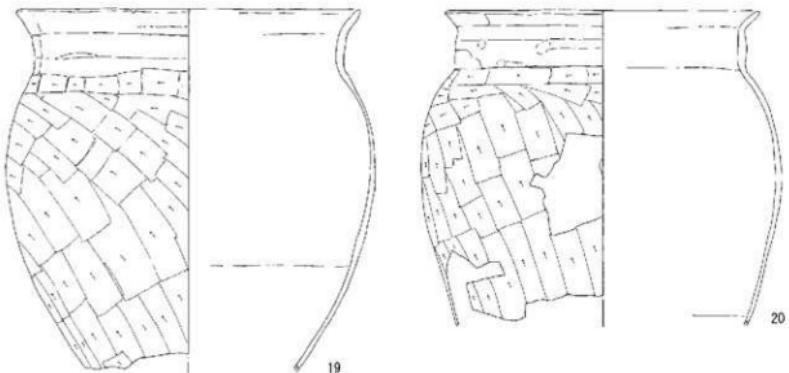
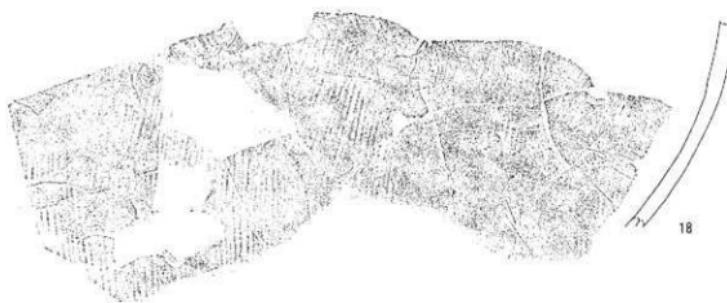
第7図 21号住居址カマド (1/30)

环形土器 (第8図2~10・図版4-2、6)

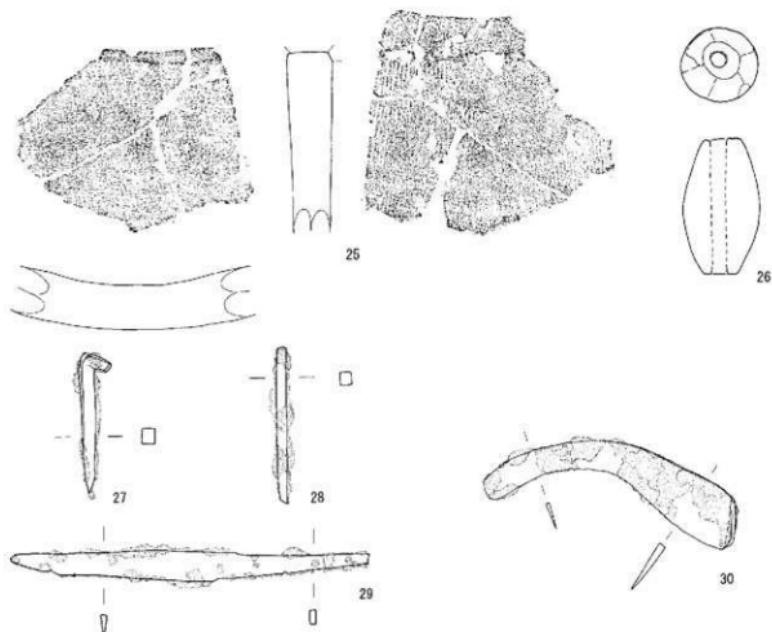
2~10の底部には、回転糸切りが施され、器内外面にロクロ水挽き整形を行っている。体部は、2、10が直線的に、3、4、7が僅かに内彎しながら、5、6、8が内彎しながら立ち上がる。3~8の口縁部は外反する。3~10の体部下端には指差し痕が残る。4の底部外面には墨書が認められるが、判読はできない。2は完形品で、口径11.4cm、底径6.2cm、内底径5.5cm、器高3.6cm、3は口径12.8cm、底径6.1cm、内底径5.9cm、器高4cm、4は推定口径12.8cm、底径5.9cm、内底径5.9cm、器高4.7cm、5は推定口径12.4cm、底径5.3cm、内底径5.1cm、器高3.7cm、6は推定口径12.8cm、底径5.5cm、内底径5.3cm、器高3.7cm、7は推定口径13cm、底径6.4cm、内底径6.3cm、器高3.9cm、8は推定口径12cm、推定底径6.3cm、推定内底径5.7cm、器



第8図 21号住居址出土遺物(1) (L/3)



第9図 21号住居址出土遺物（2）(1/3) 但し、18は(1/6)



第10図 21号住居址出土遺物（3）(1/3) 但し、26は（2/3）、27-29は（1/2）

高3.6cm、9は底径6.9cm、内底径7cm、10は推定口径8.1cm、推定底径5cm、推定内底径4.5cm、器高3cmをはかる。焼成は2~4、7~10は還元焰焼成、5と6は酸化焰焼成である。3と4の胎土には、白色針状物質を含む。

高台付壺形土器（第8図11）

11の底部は、回転糸切り後に高台を貼り付けている。器内外面にロクロ水挽き整形を施す。高台径8.2cm、高台高1cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。

皿形土器（第8図12、13・図版4-12）

12、13とも底部に回転糸切りを施す。器内外面にロクロ水挽き整形を行っている。12の体部は直線的に立ち上がり、外反する口縁部に続く。12は口径16cm、底径6.7cm、器高2.8cm、13は底径6.5cmをはかる。焼成はともに還元焰焼成である。

長頸瓶形土器（第8図14、15・図版4-14）

14の底部は回転糸切りを行った後に高台を貼り付けている。器内外面にロクロ水挽き整形を施している。胴部は彎曲しながら立ち上がり、肩部で大きく屈曲する。頭部は直線的で僅かに開き、大きく外反する口縁部へ続く。口唇部は垂直に立ち上がる。口径5.6cm、胴部径9.8cm、高台径6.2cm、高台高0.6cm、器高12.8cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。

15は肩部の破片で、器内外面にロクロ水挽き整形が施される。器外面に、灰釉が施釉される。焼成は還元焰焼成である。

浅鉢形土器（第8図16・図版4-16）

16は器内外面にロクロ水挽き整形が施される。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。胴部器外面に線刻の文字が認められるが、判読できない。焼成は酸化焰焼成である。

壺形土器（第8図17、第9図18~24・図版4-18、20）

17、18は須恵器である。器内外面にロクロ水挽き整形が施される。17は開きながら立ち上がる頸部で、外反する口縁部へ続く。18は胴部で、器外面に縱方向の平行叩きが行われ、器内面に当て具痕が残る。焼成はとともに還元焰焼成である。

19~24は土師器である。19、20は口縁部から胴部下半、21~23は口縁部から胴部上半が残る。口縁部器内外面に横ナデを施し、器外面は頸部直下が横方向に、胴部は縱及び斜め方向に範削りを行っている。頸部はコの字状を呈し、口縁部は大きく外反する。24は胴部下半から底部で、器外面に斜め方向の範削りを施す。19は口径20.9cm、20は口径19.1cm、21は口径20.6cm、22は推定口径19.4cm、23は推定口径23.9cm、24は推定底径4.1cmをはかる。

平瓦（第10図25）

25の凹面には布目痕が残り、凸面には繩叩きが施される。端面及び凹面端部に範削りを行っている。焼成は酸化焰焼成である。

土錘（第10図26）

26は円筒形で、中央が膨らむ形態である。長さ4.1cm、孔径4mm、重さ20gをはかる。

釘（第10図27、28・図版4-27）

27は頭部を、28は頭部及び先端部を欠損する。断面はともに方形を呈する。

刀子（第10図29・図版4-29）

29は茎を欠損する。両開造りで刀部幅1.2cmをはかる。

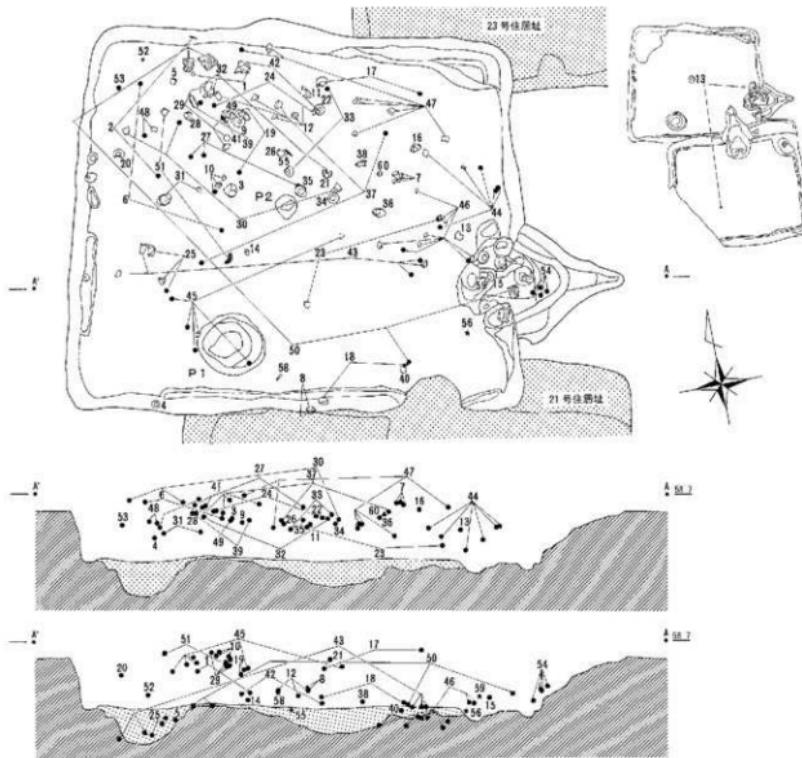
鎌（第10図30・図版4-30）

30は完形品である。曲刃で、柄の装着部分は折り返される。長さ15.9cm、刃幅1.6~3.3cm、背幅0.2~0.4cmをはかる。

4：22号住居址

本住居址は調査区中央に位置する。21、23号住居址と重複し、新旧関係は、本住居址が23号住居址より新しく、21号住居址より古い。平面プランは長方形を呈し、南北4.8m、東西5.5mをはかる。主軸方位はN-102°-Eを示す。壁高は36~80cmと非常に深く掘り込まれており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は概ね平坦だが、北東コーナーに沿う部分が、テラス状に一段高くなる。住居中央からカマド前、南壁付近にかけて、良く締まっている。カマドは東壁の南寄りに構築されている。周溝は南壁と西壁の一部に沿う部分で検出し、幅6~22cm、深さ3~9cmをはかる。ピットは住居中央西側と南側で2本検出した。P1は楕円形を呈し長軸84cm、短軸76cm、深さ38cm、P2は円形で径30cm、深さ13cmをはかる。

貼床下は、住居中央部から北側にかけて楕円形、円形を呈する土壤状の掘り込みが、複数存在する。覆土には、焼土や粘土のブロックなどが多く含まれる箇所もある。掘り込みは長軸132~170cm、短軸80~



第11図 22号住居址 (1/60) 但し、住居址間の接合図は (1/200)

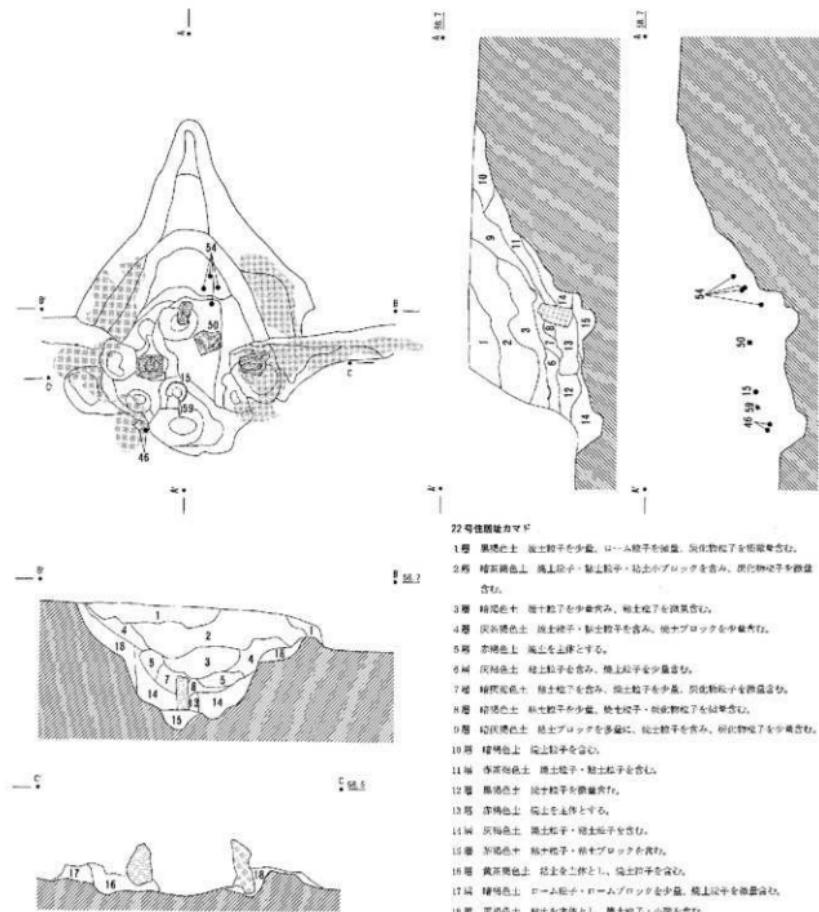
100cm、深さ10~56cm程の規模である。土壤状の掘り込みが見られない部分は2~23cm程で、北西コーナーがやや深くなる。

カマド

本住居址のカマドは、東壁中央のやや南寄りに構築される。V字形のプランで、壁外に122cm掘り込まれ、幅139cm、奥行き208cmをはかる。火床部は床面から20cm掘り込まれ、幅33cm、奥行き38cmである。火床部から煙道に向かって、傾斜を持って立ち上がり、煙出し部では緩やかになる。カマド左右には袖を構築していた粘土の一部と、袖の基礎として用いられた礫が残る。また、火床部中央に支脚と見られる礫が残されている。

出土遺物

40は床面直上、5、25は貼床下からの出土である。



第12図 22号住居址カマド (1/30)

蓋形土器 (第13図 1~7・図版 4-1、4、7)

1~7は器内外面にロクロ水挽き整形を行っている。天井部外面は、1~6が回転範削りを、7が回転糸切りを施される。1のつまみは中央部が窪み、2、3は擬宝珠状のつまみを有する。4~6のつまみは欠損する。1~7の天井部は緩やかに彎曲し、垂直に屈曲する口縁部に続く。1は推定口径18.8cm、器高4.9cm、2は推定口径17.6cm、器高4.1cm、3は推定口径15.3cm、器高3.9cm、4は口径12.1cm、5は推定口径13cm、6は推定口径12cm、7は口径16.5cm、器高2.6cmをはかる。焼成はすべて還元焰焼成である。1は胎土に白色針状物質を含む。

坏形土器（第13図8～19、第14図20～26・図版4－8、9、15～18・図版5－19、20、22、25）

8～26の器外面にはロクロ水挽き整形が施される。底部は、8が回転糸切り後回転箇削り、9～26は回転糸切りを行っている。体部は、9、10、12～15は直線的に、8、11、16、17、19～24は僅かに内脣しながら、18、25は内脣しながら立ち上がる。口縁部は、11、18、21～24は僅かに外反、25は外反する。8～10、12、13、16～21、23、24の体部下端には、指差し痕が残る。22の底部器外面には「寺」と思われる墨書きが認められる。26の底部器外面には、カマ印が見られる。8は口径12.1cm、底径6.2cm、内底径5.7cm、器高3.9cm、9は完形品で、口径13.2cm、底径5.7cm、内底径6.2cm、器高3.9cm、10は推定口径12.8cm、底径6.5cm、内底径6.6cm、器高3.7cm、11は口径12.1cm、底径7.3cm、内底径6.3cm、器高3.9cm、12は推定口径12cm、底径6.1cm、内底径6cm、器高3.4cm、13は口径12.2cm、底径6.7cm、内底径6.4cm、器高3.6cm、14は推定口径11.8cm、底径6.2cm、内底径6cm、器高3.2cm、15は口径12.6cm、底径7.3cm、内底径6.7cm、器高3.5cm、16は口径13.6cm、底径6cm、内底径6.8cm、器高4.4cm、17は口径13.4cm、底径5.7cm、内底径7.2cm、器高4.1cm、18は口径13.2cm、底径6.5cm、内底径7.5cm、器高4.2cm、19は口径13.5cm、底径5.7cm、内底径6.4cm、器高3.8cm、20は口径12.8cm、底径5.6cm、内底径6.3cm、器高3.8cm、21は推定口径12cm、底径6.5cm、内底径6.9cm、器高3.4cm、22は口径12cm、底径7.1cm、内底径6.8cm、器高3cm、23は推定口径11.8cm、底径6.4cm、内底径6.2cm、器高3.6cm、24は推定口径11.8cm、底径5.6cm、内底径5.8cm、器高3.7cm、25は口径12.5cm、底径6.6cm、内底径6.7cm、器高3.5cm、26は底径6.2cm、内底径7.1cmをはかる。焼成は、24、26が酸化焰焼成、他はすべて還元焰焼成である。8、12、23～25の胎土には、白色針状物質が含まれる。

高台付坏形土器（第14図27、28）

27、28の底部は回転糸切り後に高台を貼り付けている。器外面にロクロ水挽き整形を施す。体部は直線的に立ち上がり、27の口縁部は僅かに外反する。27は推定口径12.6cm、高台径7.6cm、内底径8.2cm、器高5.1cm、高台高0.8cm、28は推定口径11cm、高台径7.6cm、内底径7.3cm、器高4.4cm、高台高0.8cmをはかる。焼成はともに還元焰焼成で、27の胎土には白色針状物質が含まれる。

椀形土器（第14図29～34、第15図35・図版5－29、31、34、35）

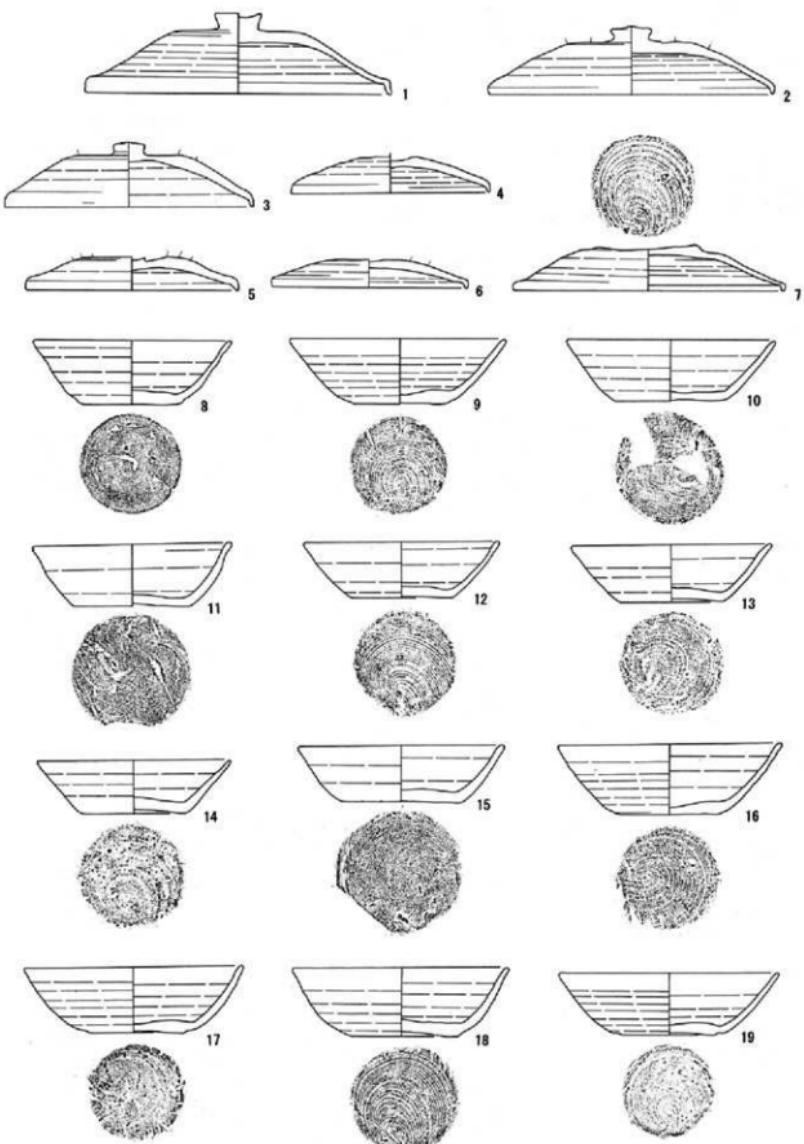
底部は29が回転糸切り後外周部回転箇削り、30～35は回転糸切りを施す。器外面にロクロ水挽き整形を行っている。29は体部下端に箇削りを施す。30～35の体部下端に指差し痕が見られる。体部は僅かに内脣しながら立ち上がり、口縁部へ続く。35の口縁部は外反する。29は口径14.1cm、底径7.8cm、内底径6.9cm、器高6.1cm、30は推定口径14cm、底径7.3cm、内底径7.3cm、器高6.1cm、31は口径14.8cm、底径6.8cm、内底径7.5cm、器高5.1cm、32は口径14.8cm、底径7.2cm、内底径7cm、器高5.1cm、33は口径13.8cm、底径6.1cm、内底径7.1cm、器高5.1cm、34は口径14.2cm、底径8cm、内底径6.5cm、器高5.3cm、35は口径13.6cm、底径8.6cm、内底径7.3cm、器高5.7cmをはかる。焼成は29～33、35が還元焰焼成、34が酸化焰焼成である。

高台付椀形土器（第15図36、37）

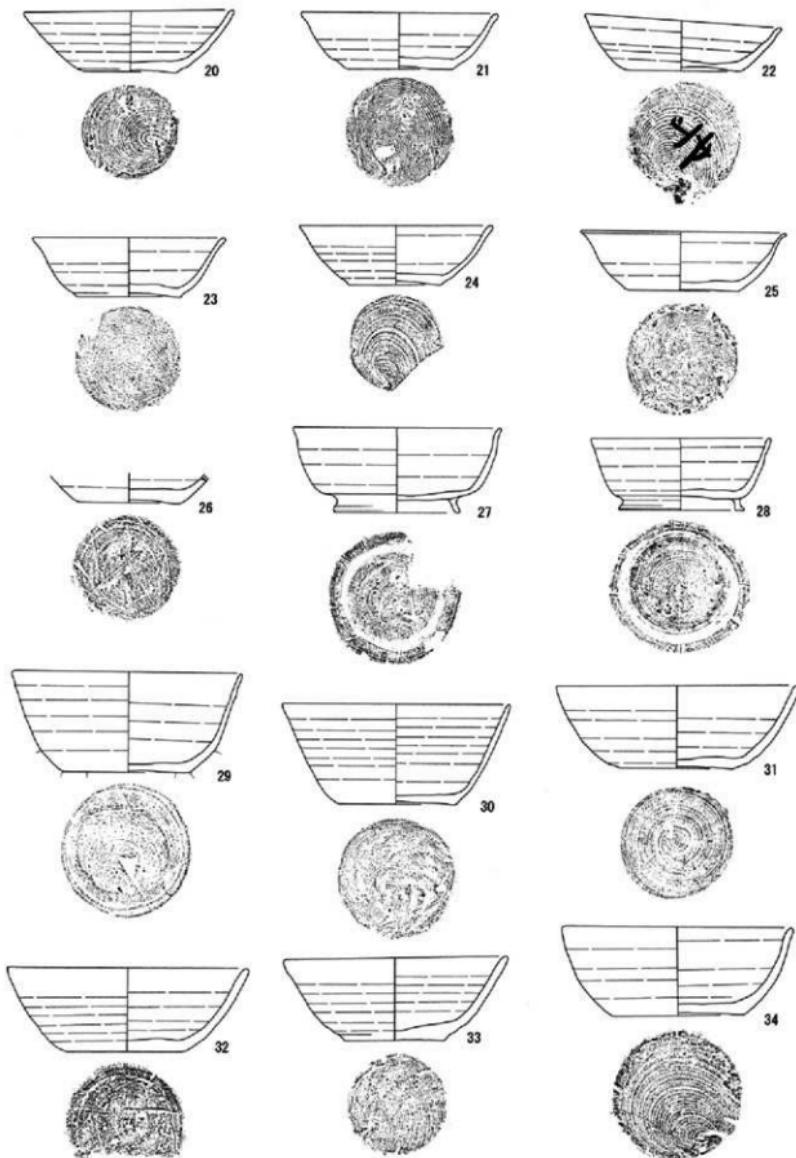
36、37の底部は回転糸切り後に高台を貼り付けるが、37の高台は欠損している。器外面にロクロ水挽き整形を施す。体部は36が直線的に、37は僅かに内脣しながら立ち上がる。36は推定口径15.3cm、高台径8.8cm、内底径8.5cm、器高8.2cm、高台高0.8cm、37は推定口径16.4cm、推定内底径8.4cmをはかる。焼成はともに還元焰焼成である。

壺形土器（第15図38・図版5－38）

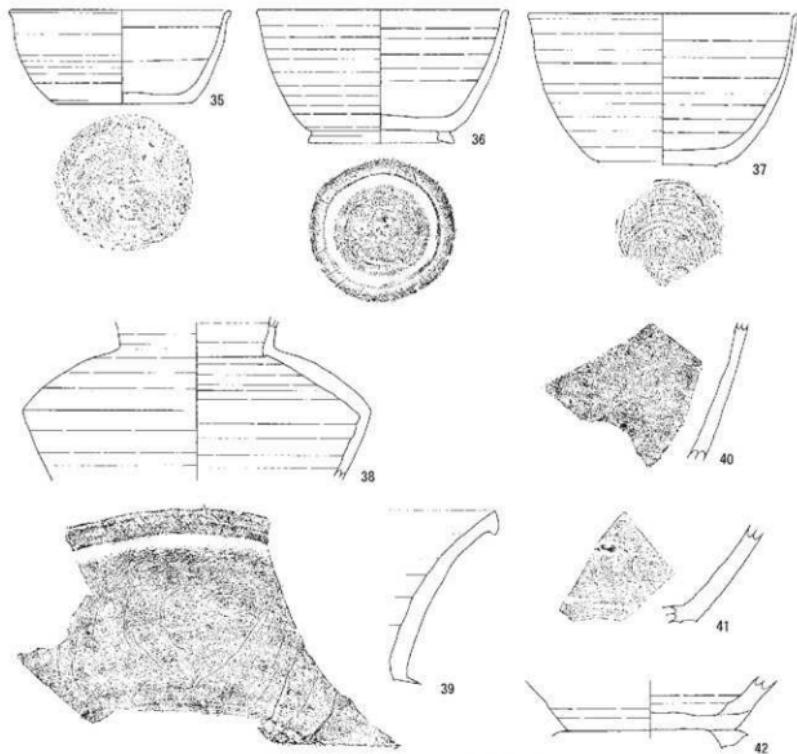
38は短頸壺である。器外面にロクロ水挽き整形を施す。肩部で大きく屈曲する。焼成は還元焰焼成で



第13図 22号住居址出土遺物（1）（1/3）



第14図 22号住居址出土遺物(2) (1/3)



第15図 22号住居址出土遺物（3）（1/3）

ある。胎土の状態から、搬入品と考えられる。

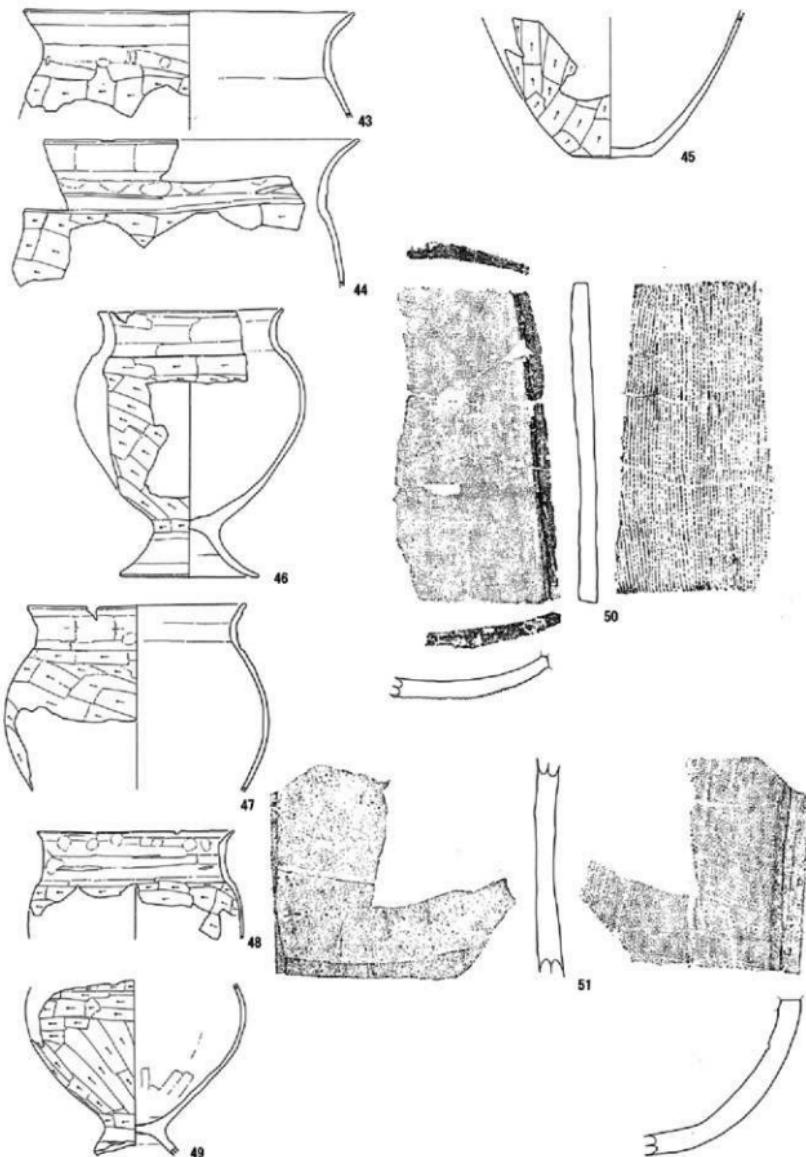
壺形土器（第15図39～42、第16図43～45）

39～42は須恵器で、器内外面にロクロ水挽き整形を施す。39の器内面には自然釉が残る。40の器内面には、當て具痕が見られる。41、42には高台が貼り付けられる。焼成はすべて還元焰焼成で、40の胎土には白色粘土質物質が含まれる。

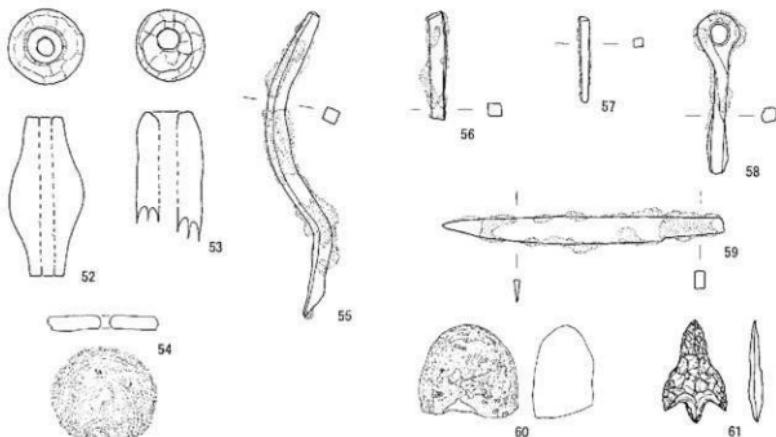
43～45は土師器である。43、44は口縁部器内外面に横ナデを施し、胴部は横方向に範削りを行っている。頸部はコの字が崩れており、大きく外反する。44の胴部は斜め方向に範削りを行っている。43は推定口径21cm、45は底径5cmをはかる。

台付壺形土器（第16図46～49・図版5～46、47）

46～48の口縁部器内外面は、横ナデを施している。胴部の範削りは斜め方向、頸部に近い部分は横方向である。46、47の頸部はコの字がやや崩れ、48はコの字を呈する。49の胴部上半は横方向、胴部下半は斜め方向に範削りを施す。46、49の脚部器内外面は横ナデを行っている。46は推定口径11.3cm、底径8.4cm、



第16図 22号住居址出土遺物（4）(1/3) 但し、50は（1/6）



第17図 22号住居址出土遺物 (5) (1/3) 但し、52、53、61は(2/3)、55~59は(1/2)
器高16.3cm、47は口径14.1cm、48は推定口径12.1cmをはかる。

平瓦 (第16図50・図版5-50)

50の凹面には布目痕が残り、凸面には繩叩きが施される。側面と端面、凹面側部と端部に範削りを行っている。焼成は酸化焰焼成である。

丸瓦 (第16図51)

51は凹面に布目痕が残る。凸面は繩叩き後、ナテ整形が行われている。側面と凹面側部、凸面側部に範削りが施される。焼成は還元焰焼成である。

土錐 (第17図52・53・図版5-52)

52、53は円筒形で、中央が膨らむ形態である。52は孔端部の幅が狭い。52は長さ4.9cm、孔径5mm、重さ20g、53は孔径6mmをはかる。

紡錘車 (第17図54・図版5-54)

54は須恵器坏底部を利用した紡錘車である。底部外面には回転糸切りが施されている。縁辺を磨って形を整えている。径6.7cmをはかり、中央に径6mmの孔が穿孔されている。カマド内からの出土である。

釘 (第17図55~57・図版5-55)

55は頭部を、56、57は頭部と先端部を欠損する。断面はすべて方形を呈する。

壺金 (第17図58・図版5-58)

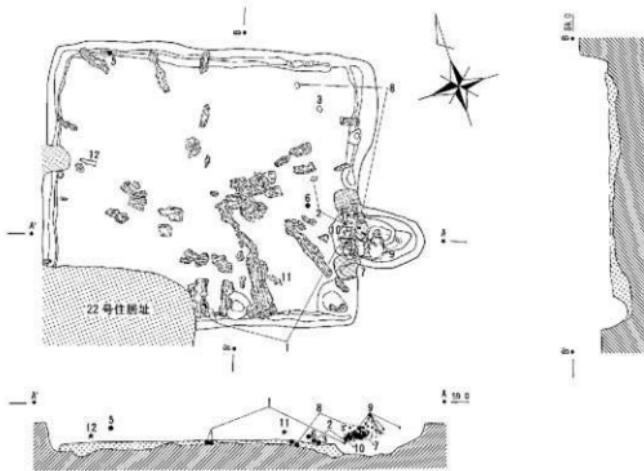
58は断面方形を呈す1本の鉄を曲げ、捩じりながら製作している。頭部に円形の孔を持つ。残存長6.6cm、孔径は8mmである。

刀子 (第17図59・図版5-59)

59は茎を欠損する。片開造りで刀部幅は1.3cmをはかる。

磨石 (第17図60)

60は表裏両面、側面に磨痕が残る。表面中央には窪みが見られる。石質は流紋岩である。



第18図 23号住居址 (1/60)

石錐（第17図61）

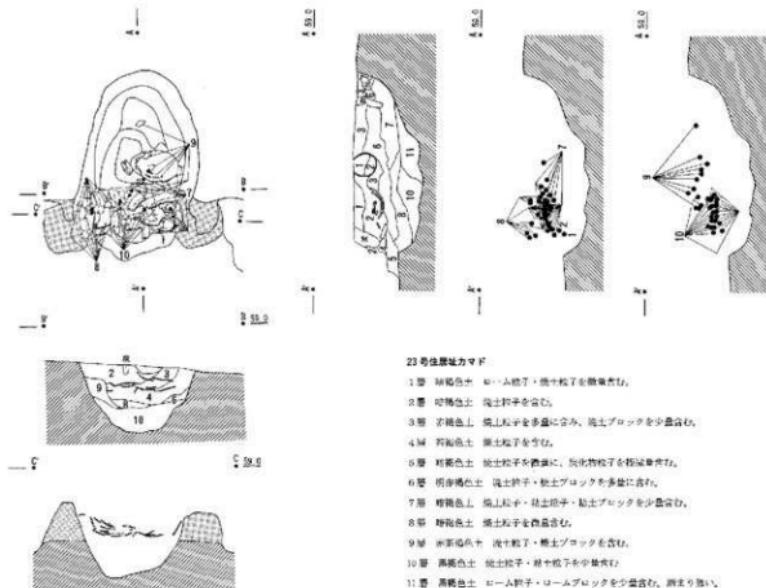
有茎石錐の完形品で、長さ3.1cm、幅1.95cm、重さ1.5gをはかる。石質はチャートである。

5：23号住居址

本住居址は調査区中央で検出され、南側で22号住居址と重複する。新旧関係は、本住居址が古い。平面プランは長方形を呈し、南北3.5m、東西4mをはかる。主軸方位はN-109°-Eを示す。本住居址の覆土中からは、柱や屋根の炭化材が多量に出土しており、焼失住居と考えられる。壁高は16~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、住居中央から南壁、カマド前、北東コーナーにかけて顕著な硬化が認められる。周溝はカマドを除く壁沿いに巡り、幅5~18cm、深さ5~8cmをはかる。カマドは東壁の南寄りに構築されている。ピットは南壁付近で1本検出してお、入口施設に伴うものと思われる。径35cm、深さ14cmをはかる。また、東南コーナーに接して、長軸46cm、短軸40cm、深さ10cmの貯蔵穴を持つ。貼床下は2~25cm掘り下がり、住居中央部が高く残り、壁に近い部分が深くなる。

カマド

平面プランはU字形を呈する。壁外に77cm掘り込まれ、幅76cm、奥行き117cmをはかる。火床部は床面から16cm掘り込まれ、幅34cm、奥行き35cmである。火床部から煙道に向かって、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。カマド両側には、袖の粘土が残る。袖の間からは、入れ子状になつて潰れた状態で土師器壺（第20図7、8、第21図10）が出土している。カマド中央部には支脚が残る。その右側からは、土師器壺（第21図9）が天井部崩落とともに倒れた状態で出土している。



第19図 23号住居址カマド (1/30)

出土遺物

3は貼床下の出土である。

坏形土器 (第20図1~5・図版5-1、3)

1、2は土師器である。口縁部と器内面に横ナデ整形を施し、体部と底部は範削り整形を行っている。丸底の底部から彎曲しながら立ち上がり、口縁部へ続く。

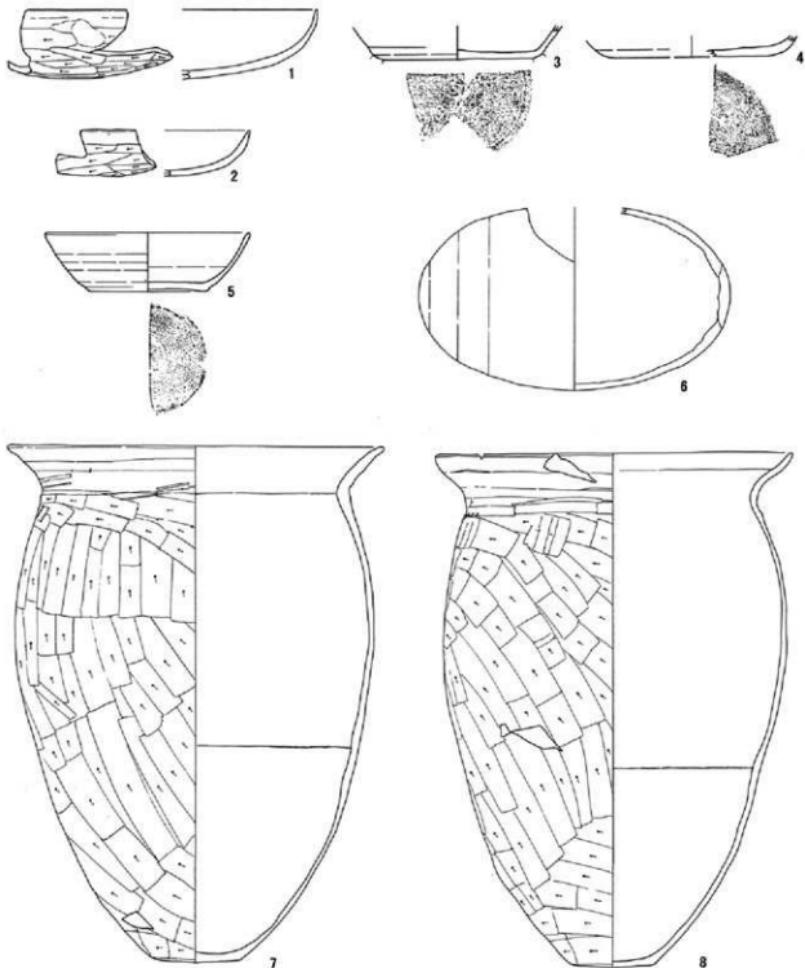
3~5は須恵器である。器内外面にロクロ水挽き整形を施す。底部は3、4が回転範削り、5が回転糸切りを行っている。体部は、3が直線的に、5は僅かに内彎しながら立ち上がる。3の体部下端には範削りが施され、5は指差し痕が残る。3は推定底径9cm、推定内底径9.4cm、4は推定底径10.4cm、推定内底径11.3cm、5は推定口径12.5cm、推定底径7cm、推定内底径6.8cm、器高3.6cmをはかる。焼成はすべて還元焰焼成である。3の胎土には白色針状物質が含まれる。

横瓶形土器 (第20図6・図版6-6)

6は胴部で、器内外面にロクロ水挽き整形を施す。器外面は平行叩きを行った後、横ナデを行っている。器内面には當て具痕及び胴部閉塞時の指頭によるしばり込みの痕跡が残る。胴部幅38cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。

壺形土器 (第20図7、8、第21図9、10・図版6-7~10)

7~10は土師器である。口縁部は器内外面に横ナデを施し、胴部器外面上半は横及び斜め方向に、胴部中位から下半は斜め及び縱方向に、底部付近は横方向の範削りを行っている。頸部から口縁部は、大きく

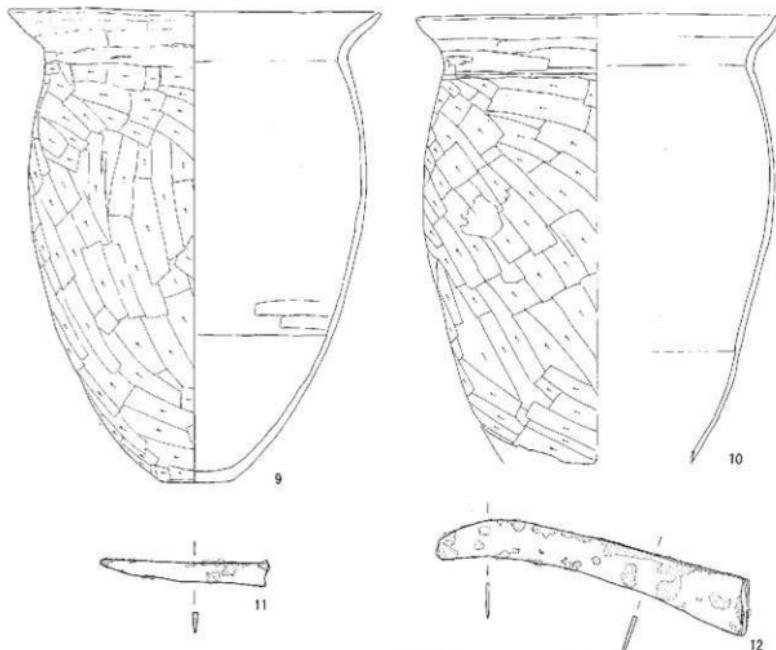


第20図 23号住居址出土遺物（1）(1/3) 但し、6は(1/6)

外反する。7は口径22.9cm、底径5.4cm、器高32cm、8は口径21.7cm、底径4.9cm、器高31.2cm、9は口径22.7cm、底径4.6cm、器高28.5cm、10は口径22cmをはかる。

刀子（第21図11）

11は茎を欠損する。片開造りで刀部幅1.3cmをはかる。



第21図 23号住居址出土遺物（2）(1/3) 但し、11は(1/2)

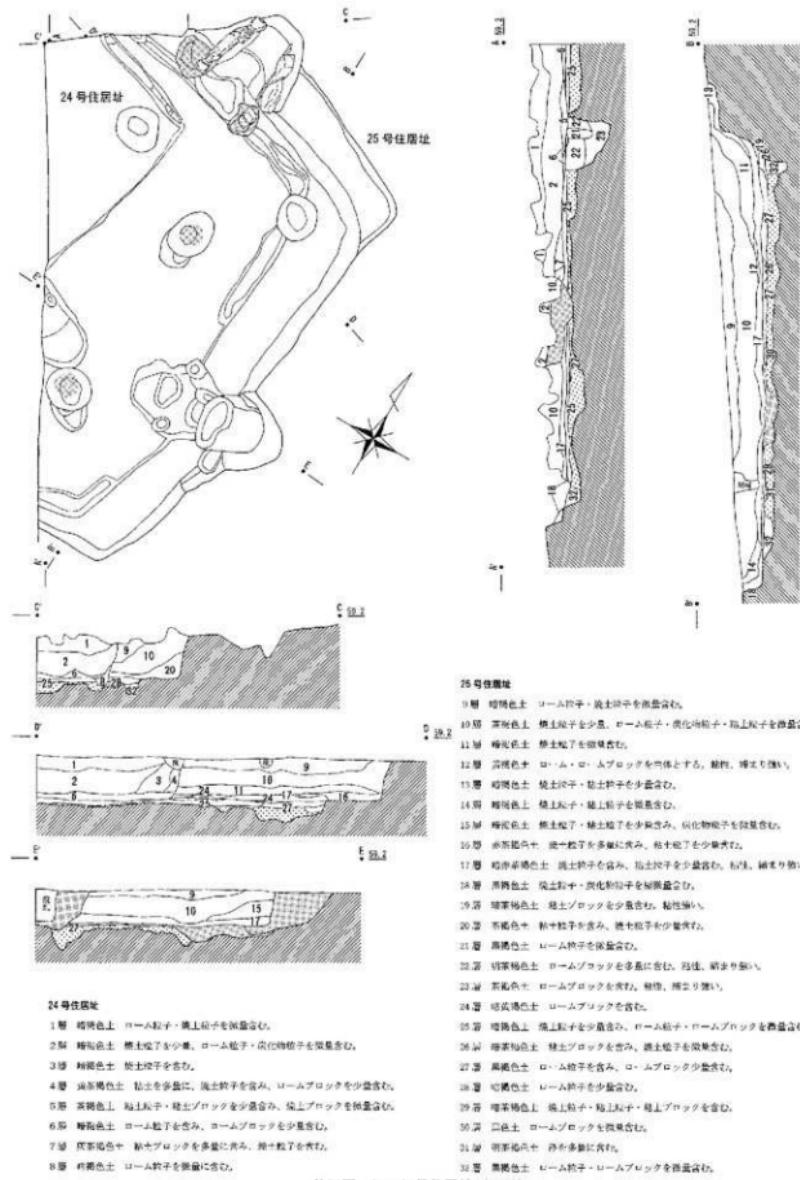
鎌（第21図12・図版6-12）

12は完形品である。刃部は緩やかに曲がる形状を呈し、柄の装着部分は折り返される。長さ19.4cm、刃幅1.3~3.1cm、背幅0.1~0.2cmをはかる。

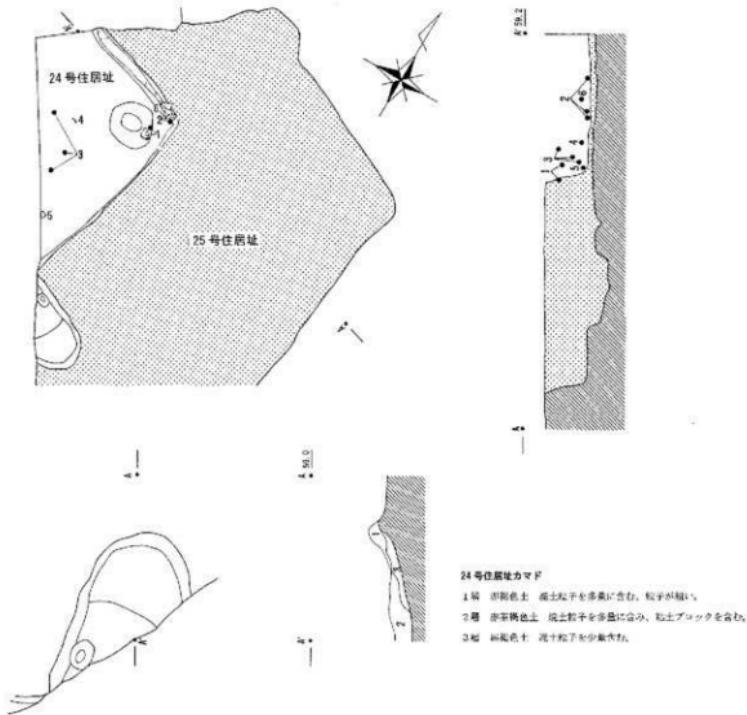
6：24号住居址

本住居址は調査区北西隅に位置する。25号住居址の掘り下げ時に、カマドと見られる密度の濃い焼土を検出したことで、住居址が入れ子状に重複していることが判明した。新旧関係は、本住居址が25号住居址より新しい。住居址の大部分が調査区外へ続くため、平面プラン及び規模は不明である。壁高は53cmで、傾斜をもって立ち上がる。カマドは東壁に築かれている。床面はほぼ平坦で、硬く締まっている。周溝は北壁に沿って検出し、幅6~14cm、深さ3~8cmをはかる。北東コーナーには、径56cm、深さ20cmのピットを持つ。

本住居址は、北壁では床面と同レベルで周溝を確認した。その後、25号住居址を調査した際、2軒の床面レベルが同一であることが判明した。このことから、24号住居址は25号住居址の床面を再利用したと考えられる。



第22図 24、25号住居址 (1/60)



第23図 24号居住址 (1/60) カマド (1/30)

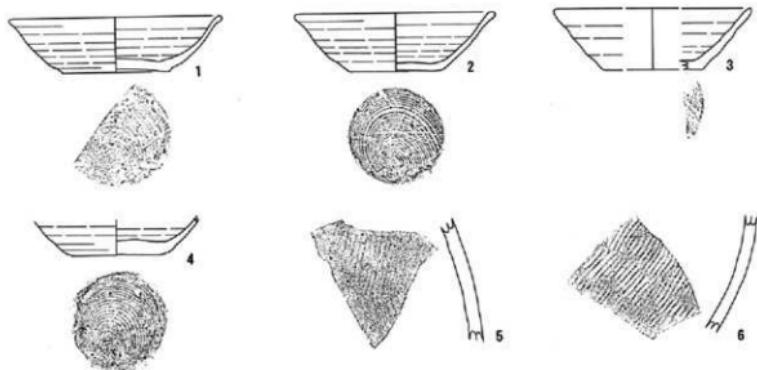
カマド

本居住址のカマドは、東壁に構築されている。大部分が調査区外になるため、規模は不明である。平面プランは、U字形を呈すると思われる。壁外に112cm掘り込まれ、幅65cm以上をはかる。火床部から煙道に向かって、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物

壺形土器 (第24図 1~4・図版6-1、2、4)

1~4の底部は回転糸切りを行い、器内外面にロクロ水挽き整形を施す。1、2、4の体部は僅かに内彎しながら、3は直線的に立ち上がる。1、2の口縁部は外反する。1の底部外面には、カマ印が見られる。1は推定口径13cm、底径6.6cm、内底径5.4cm、器高5.4cm、2は完形品で、口径12.2cm、底径5.8cm、内底径5cm、器高3.6cm、3は推定口径12cm、推定底径6cm、推定内底径5.4cm、器高3.7cm、4は底径6.7cm、内底径5.8cmである。焼成はすべて還元焰焼成である。



第24図 24号住居址出土遺物 (1/3)

彫形土器（第24図5、6）

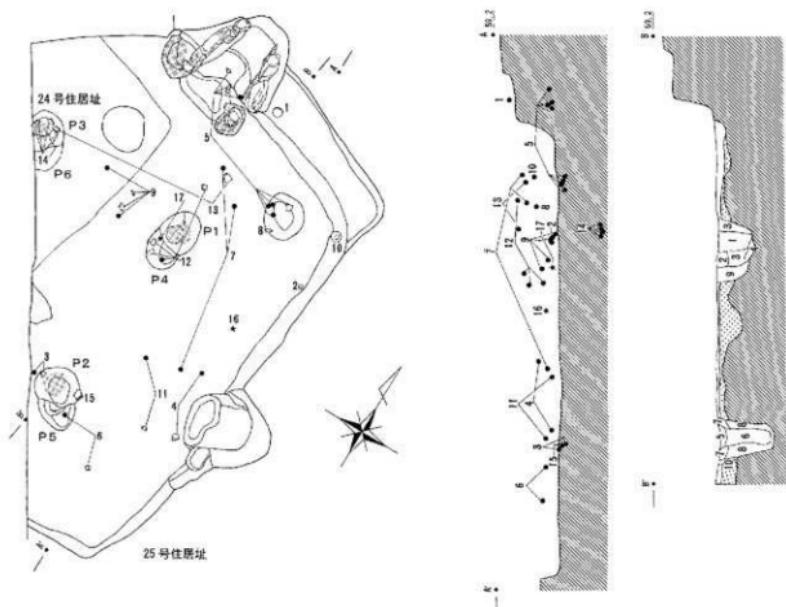
5、6は須恵器である。器内外面にロクロ水挽き整形を行い、器外面に斜め方向の平行叩きが施される。器内面には、當て具痕が残る。焼成はともに還元焰焼成である。

7：25号住居址

本住居址は調査区北西側で検出した。24号住居址と重複し、新旧関係は本住居址が古い。住居址は調査区外へ続くため、平面プランは不明である。規模は南北5.9mをはかる。壁高は24~57cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で硬く締まっており、特に住居中央から北、東カマド前まで顕著な硬化をみせる。カマドは東壁の南寄りに構築し、その後、北壁に造り替えている。北カマドの右側には北東コーナーまで棚状施設が設けられ、幅231cm、奥行き58cm、床面からの高さ48cmをはかる。北東コーナー付近には、径58cm、深さ11cmをはかるピットを検出している。柱穴は6本検出した。各コーナーに対応する位置に配されると思われる。P 1は径45cm、深さ40cm、P 2は径58cm、深さ66cm、P 3は径45cm以上、深さ54cmをはかる。更に3本とも南側に古い柱穴（P 4~6）が検出されており、カマド移設時に柱穴の位置も変更されたものと考えられる。P 4は径43cm、深さ31cm、P 5は径45cm、深さ28cm、P 6は径35cm以上、深さ38cmである。

床下からは、拡張前の住居址（第28図）を検出している。南北は5.2mをはかるが、平面プラン及び東西の規模は不明である。壁高は最大で11cmをはかる。周溝は壁沿いに巡り、カマドにかかる部分を埋め戻している。幅6~23cm、深さ5~10cmである。床面は、北東コーナー付近がやや下がるが概ね平坦で、コーナー付近を除く部分は顕著な硬化をみせる。カマドは東壁の南寄りに築かれる。

貼床下は、拡張前の住居構築時に7~16cm施され、壁に近い部分が落ち窪む。拡張された部分は、旧住居床面より僅かに高い面で地山を平らに整え、そのまま新たな床面とし、旧住居部分は埋め戻したと考えられる。



25号住居址地盤穴

1層 砂褐色土 ローム粒子・粘土粒子を含む。溝まり良好。

2層 鳥糞色土 粘土粒子を少量含む。

3層 砂褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。

4層 砂褐色土 ロームブロックを含む。

5層 砂褐色土 粘土粒子・粗化物粒子を微量含む。溝まり良好。

6層 砂褐色土 ローム粒子・粘土粒子を微量含む。溝まり良好。

7層 砂褐色土 粘土粒子を含む。

8層 砂褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む。

9層 砂褐色土 ローム粒子・ロームブロックを含む。

10層 砂褐色土 ロームブロック・粘土粒子を少量含む。

第25図 25号住居址（1）(1/60)

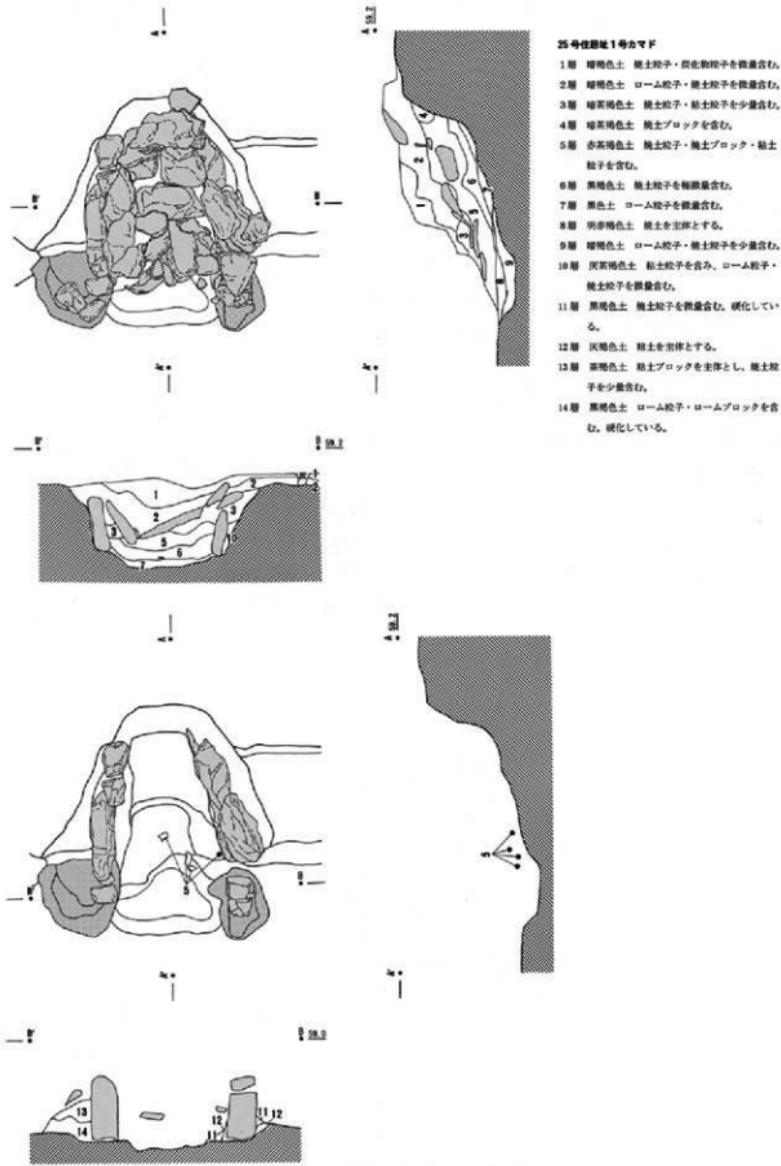
カマド

1号カマド

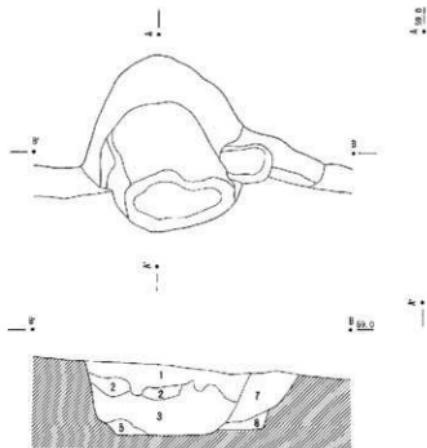
最も新しいカマドで、北壁に築かれている。平面プランはU字形を呈する。壁外へ92cm掘り込まれ、幅146cm、奥行き143cmをはかる。火床部は床面から11cm掘り込まれ、幅59cm、奥行き32cmである。火床部から煙道部にかけてテラス状に段を持ち、先端部へ向けて急傾斜で立ち上がる。本カマドでは、天井部の構築材として用いられた多量の緑泥片岩や砂岩等が、火床部から煙道部にかけて崩れ落ちた状態で出土している。火床部及び煙道部の壁に沿って、大形のチャートが配されている。火床部両側には袖の一部が残る。直方体に整えられた凝灰岩と思われる礫が立てられ、その周囲を粘土が覆っている。凝灰岩の一部は、カマド前の床面上まで転がり落ちていた。

2号カマド

東壁の南寄りに築かれている。平面プランはU字形を呈する。壁外へ68cm掘り込まれ、幅97cm、奥行き108cmをはかる。火床部は床面から16cm掘り込まれ、幅58cm、奥行き23cmである。火床部から煙道に向かって緩やかに傾斜し、先端部へ向け急傾斜で立ち上がる。



第26図 25号住居址 1号カマド (1/30)



第27図 25号住居址 2号カマド (1/30)

3号カマド

拡張前の住居址で使用されていたカマドである。東壁の南寄りに築かれている。住居拡張時に煙道部を壊されており、平面プランは不明である。壁外へ58cm以上掘り込まれ、幅103cm、奥行き134cm以上をはかる。火床部は床面から16cm掘り込まれ、幅36cm、奥行き23cmである。

出土遺物

図示した遺物は、すべて拡張後の住居址からの出土である。

蓋形土器（第29図1、2・図版6-1、2）

1は器外面にロクロ水挽き整形を施す。天井部外面は回転箝削りを行い、擬宝珠状のつまみを有する。天井部は緩やかに彎曲し、垂直に屈曲する口縁部に続く。2は水瓶蓋の完形品で、器外面にロクロ水挽き整形を施す。擬宝珠状のつまみを持つ平坦な天井部から、垂直に屈曲する口縁部へ続く。1は口径11.5cm、器高3.1cm、2は口径4.5cm、器高1.8cmで、ともに還元焰焼成である。1は胎土に白色針状物質を含む。

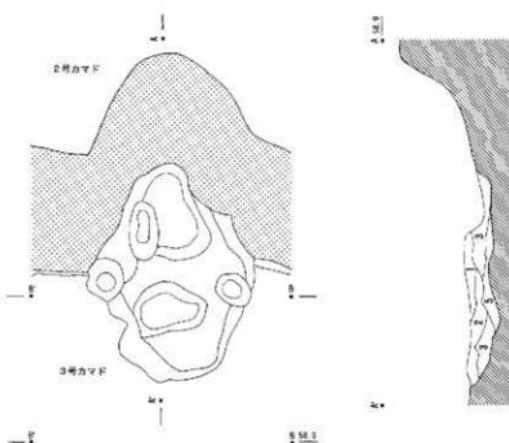
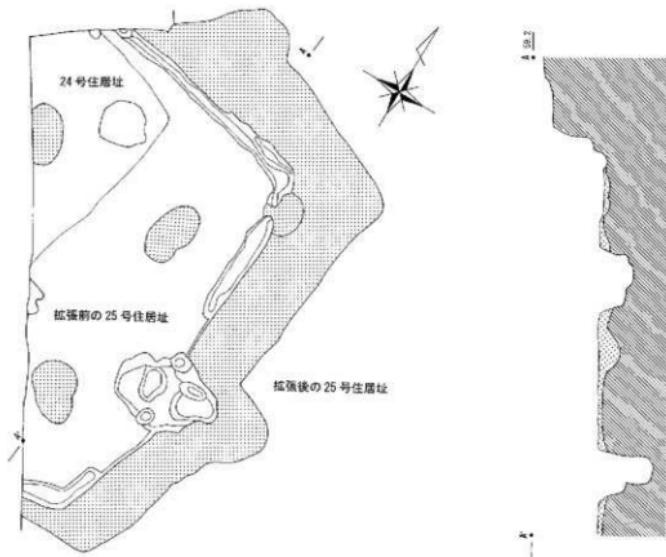
坏形土器（第29図3～11・図版6-5、10、11）

3～11は、器外面にロクロ水挽き整形を施す。底部は3が手持ち箝削り、4～8は回転糸切り後外周部回転箝削り、9～11は回転糸切りを行っている。7は体部下端に箝削りを施す。4、5、9は体部下端に指差し痕が残る。4、6の器内面底部と体部変換点に爪先技法が見られる。体部は、4～7は直線的に、9～11は僅かに内彎しながら立ちあがる。9～11の口縁部は、僅かに外反する。11は底部外面に墨書きが見られるが、判読できない。3は底径6.2cm、推定内底径7.2cm、4は口径12.5cm、底径7cm、内底径8cm、器高3.2cm、5は口径12.6cm、底径6.9cm、内底径8.3cm、器高3.4cm、6は推定口径11.8cm、推定底径8.1cm、推定内底径8cm、器高3.4cm、7は底径7cm、内底径6.7cm、8は底径7.1cm、9は推定口径11.8cm、推定底径6.6cm、推定内底径6.6cm、器高3.6cm、10は完形品で、口径12.5cm、底径6cm、内底径7.4cm、器高4cm、11

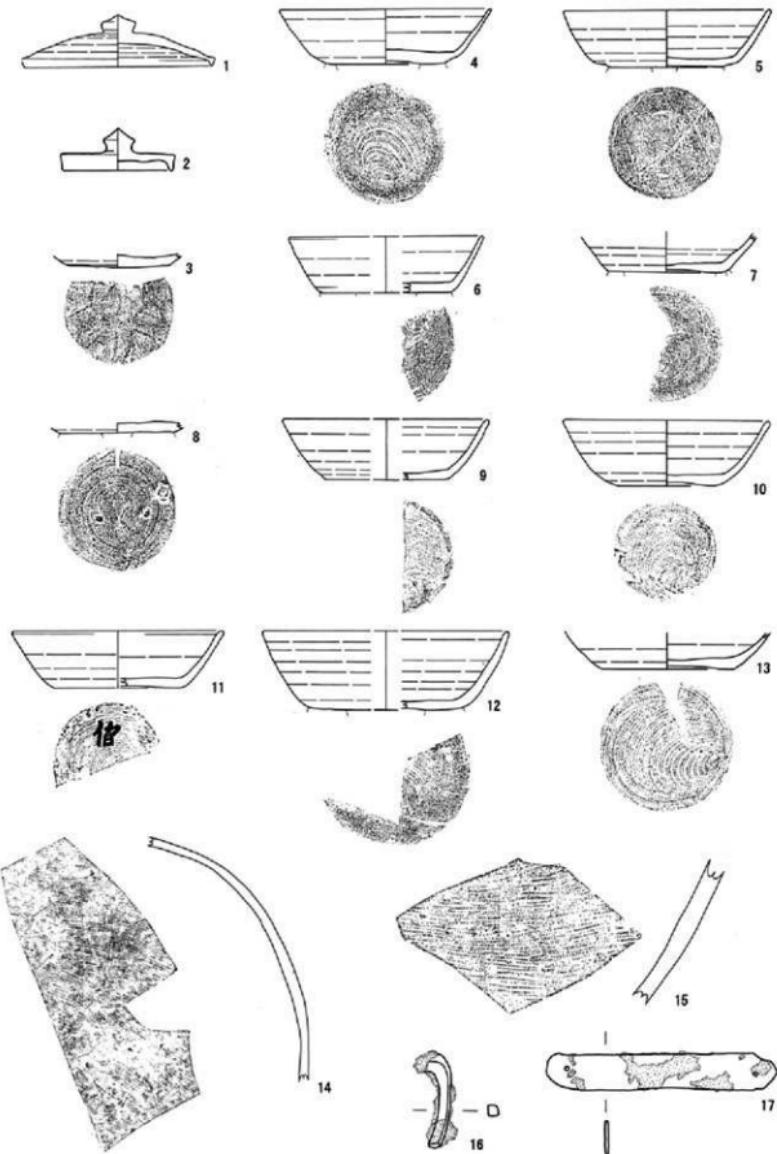


25号住居址 2号カマド

- 1層 緑褐色土 壤土粒子・粘土粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 粘土粒子・粘土ブロックを多量に含み、粘土塊を含む。
- 3層 深灰褐色土 粘土粒子を多く含む。
- 4層 水系褐色土 粘土ブロックを含むし、粘土ブロックを含む。
- 5層 黄褐色土 壤土粒子を含む。
- 6層 緑褐色土 壽土粒子・粘土粒子を少量含む。
- 7層 黑褐色土 黒土粒子・粘土粒子を微量含む。
- 8層 黑褐色土 粘土ブロックを含む、極まりない。



第28図 25号住居址（2）(1/60) 3号カマド (1/30)



第29図 25号住居址出土遺物 (1/3) 但し、2、16、17は(1/2)、14は(1/6)

は推定口径12.8cm、推定底径7.9cm、推定内底径7.6cm、器高3.5cmである。焼成はすべて還元焰焼成である。5、7、8は胎土に白色針状物質を含む。

椀形土器（第29図12、13）

12、13は器外面にロクロ水挽き整形を施す。底部は回転糸切り後外周部回転範削りである。体部下端には指差し痕が残る。体部は、12が僅かに内彎しながら、13が内彎しながら立ち上がる。12は推定口径15cm、推定底径9.4cm、推定内底径8.6cm、器高4.8cm、13は底径8.1cm、内底径7.8cmをはかる。焼成はともに還元焰焼成である。

甕形土器（第29図14、15・図版6-14）

14、15は須恵器で、器外面にロクロ水挽き整形を施す。器外面の平行叩きは、14が斜め方向、15は横方向である。器内面には當て其痕が残る。焼成はともに還元焰焼成である。

釘（第29図16）

16は頭部と先端部を欠損する。断面は方形を呈する。

鎌（第29図17・図版6-17）

17は鉄製で手縫いの可能性がある。直線的な形状を持ち、長さ9.5cm、幅1.4cmをはかる。両端が穿孔され、孔径は両側とも2mmである。

8：若宮遺跡45次調査について

若宮遺跡は、東西450m、南北550mの規模を持つ。その大部分は台地平坦部にあるが、南側に流れる下小畔川まで続く傾斜地も含む。過去の調査で検出された遺構は、ほとんどが台地平坦部に分布している。遺構の密度は高くないものの、寺院との関わりが考えられる遺構や遺物が西側から多く見つかっていることもあり、遺跡の中心部は西側ではないかと推測されている。

一方、台地平坦面と下小畔川の間に広がる傾斜地は、これまで遺構の検出が見られなかった場所である。

その傾斜地に、しかも遺跡東端の本調査区から、住居址5軒、土壙3基が検出されたわけだが、立地や遺構密度の面で、遺跡西側の様相とは大きく異なっている。隣接する傾斜地でも同様の状況が見られるのか、また、これまでの調査箇所との相違点がどのような意味を持つのか、今後の調査を注視する必要がある。

次に、検出した各遺構の帰属時期について、須恵器坏を軸に検討してみたい。

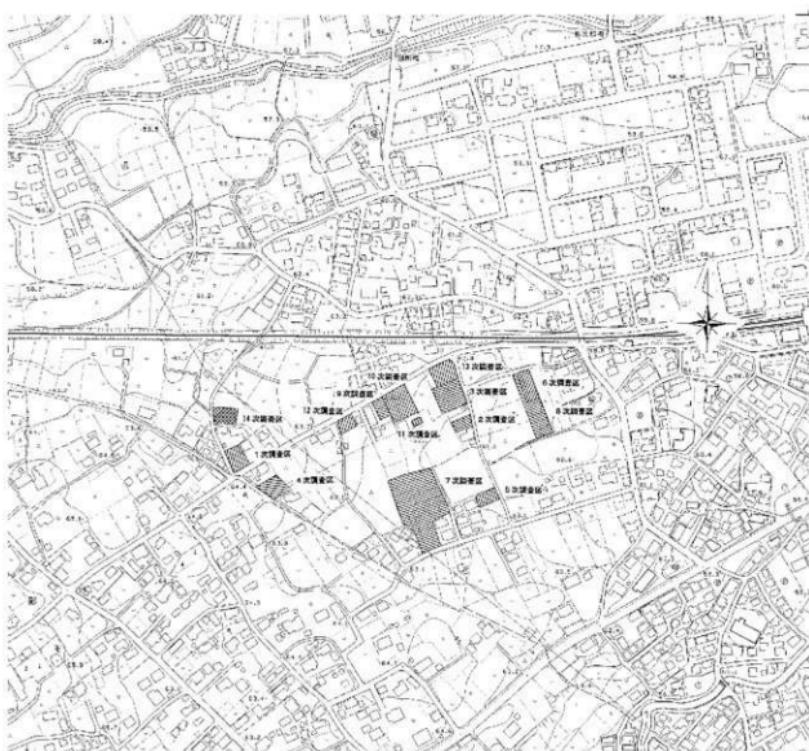
21号住居址は、壁際下層出土のものが9世紀第3四半期に属すると思われる。22号住居址は上層に遺物が集中し下層からの出土が少なく、層位的に偏りが見られる。9世紀第1四半期の特徴を持つものもあるが、大半は9世紀第2四半期の範疇で捉えられるだろう。23号住居址は出土量が少ないものの、貼床下出土の須恵器坏（第20図3）が8世紀第2四半期の中でもやや新しい時期にあたると思われる。24号住居址は9世紀第2四半期、25号住居址は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に該当するが、出土状況を勘案して8世紀第4四半期と考えたい。以上のことは、調査で確認した重複関係に矛盾しないと思われる。

本調査区では、傾斜地における遺構の集中という、これまでの調査とは異なる状況が見られた。集落としての若宮遺跡を考える上で、貴重な資料が加わったと考えられる。

参考文献

- 中平 薫 1983 「若宮 - 第3次発掘調査概報 -」 日高町埋蔵文化財調査報告書第5集 日高町教育委員会
中平 薫 2003 「常木久保 稲荷 神明」 日高市埋蔵文化財調査報告書第31集 日高市教育委員会

第3章 古道遺跡 - 14次調査 -



第30図 古道遺跡周辺地形図 (1/5,000)

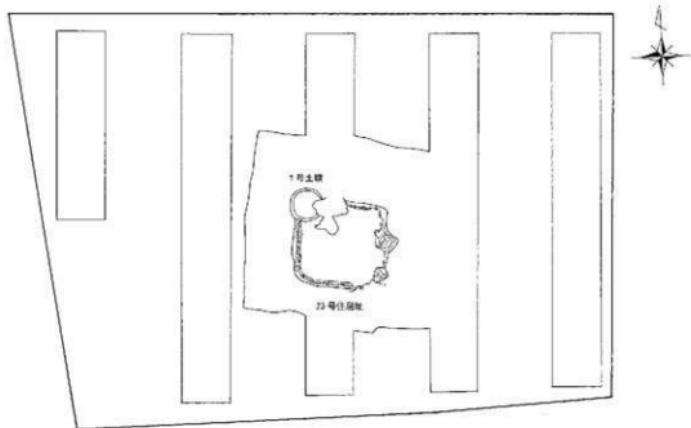
1：立地と概要

古道遺跡は小畔川と下小畔川に挟まれた東西に延びる舌状の台地上に位置している。標高は58~64mである。遺跡の中央には古道堀が東流し、JR川越線武藏高萩駅の南側を流れ下小畔川に合流している。遺跡はこの堀を挟んだ南北に広がっている。

小畔川の左岸流域には連綿と奈良・平安時代の集落跡が確認されているが、対岸の小畔川右岸にも堀ノ内遺跡、下小畔川左岸にも若宮遺跡など同時代の遺跡が所在している。

古道遺跡と堀ノ内遺跡は、小畔川と下小畔川に挟まれた台地上に広がる集落跡であるが、台地を分断するように東西に走るJR川越線によって画されている。

古道遺跡はこれまでに専用住宅、分譲住宅や共同住宅建設に伴い13回の調査を実施し、奈良・平安時代



第31図 古道遺跡14次調査区全測図 (1/200)

の住居址2軒、掘立柱建物跡13棟、土壙6基などを検出している。

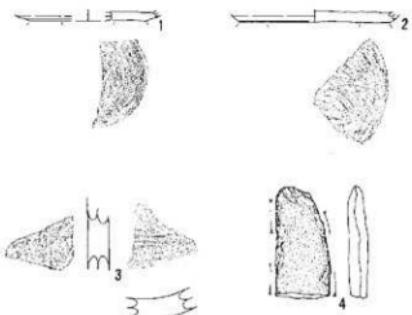
3次調査区は遺跡中央部古道堀北側に所在する。平成16年度に発掘調査を実施し、奈良・平安時代の住居址を7軒検出した。このうち柱穴を有する住居址は3軒で、東西7m、南北6.8mの規模をもつ大形の住居址2軒を含んでいる。

7次調査区は古道堀南側の緩斜面に位置している。調査区北側は古道堀に隣接している。平成18年度に調査を実施し、奈良・平安時代の住居址2軒と、東西に走る道路遺構を検出した。住居址2軒は盛土保存対応となったため、道路遺構のみの発掘調査を実施した。道路遺構は東西46mにわたり検出され、幅1.8~3.3m、深さ5~26cmを有する。一部に掘削を持ち、硬化面を有していた。硬化面下の一部には規則的に並ぶ窪みが存在していた。硬化面内から寛永通宝が1点出土している。

10次調査区は2次調査区の北西、3次調査区の西側に位置している。平成19年度に調査を実施し、奈良・平安時代の住居址6軒、掘立柱建物跡6棟、土壙6基を確認した。遺構全てが盛土保存対応となったため、詳細な時期は不明であるが、掘立柱建物跡では2間×3間のほかに3間×5間で布堀りを持つものも検出している。3間×5間の布堀りを持つ掘立柱建物跡は10次調査区から北東に250mの位置にある堀ノ内遺跡でも1棟検出されている。

12次調査区でも奈良・平安時代の住居址2軒、掘立柱建物跡3棟を確認しているが、遺構全てが盛土保存対応となったため、詳細な時期は不明である。13次調査区は3次調査区の北側に隣接し、奈良・平安時代の住居址2軒、掘立柱建物跡4棟を確認した。このうちの2棟は2間×3間だが、規模が大きく、東西に並んで検出された。

古道遺跡の北東に隣接する堀ノ内遺跡では、これまでに8世紀中葉から9世紀中葉の住居址156軒、井



第32図 遺構外出土遺物（1/3）

戸址99基、掘立柱建物跡54棟、溝60条などが調査されている。住居址には小鉛冶遺構を有するものもあった。これらの遺構が台地縁辺部から遺跡南側の下小畔川に向かう緩斜面にかけて、いくつかのまとまりを持ちながら所在している。住居址軒数からも市内最大の奈良・平安時代の遺跡である。出土遺物も耳皿、銅製巡方、石製丸鞘、漆紙、皇朝十二錢のひとつである「隆平永宝」や紡錘車、鎌、斧などの鉄製品のほかに、「仲」と書かれた墨書き土器など多くの遺物が出土している。

堀ノ内遺跡でもJR川越線の隣接地まで住居址が確認されており、地形や遺構の分布等からも古道遺跡と堀ノ内遺跡が同一の集落跡と考えられる。

2：調査経過

調査を実施した地点は畠で、遺跡の西端に位置する。調査区の西側は小畔川からの谷が入り込み傾斜面となっている。所在は埼玉県日高市大字高萩字乙別所前435番地5である。調査面積は377m²である。調査は平成26年5月1日から平成26年5月20日に実施した。

調査区南北に幅3mトレンチを5本設定し、重機を用いて耕作土を除去し、遺構確認面まで28~50cm掘り下げた。遺構確認面は暗黄褐色ローム層であった。調査区中央で奈良・平安時代の住居址を1軒、時期不明の土壤1基を検出した。

3：遺構外出土遺物

坏形土器（第32図1、2）

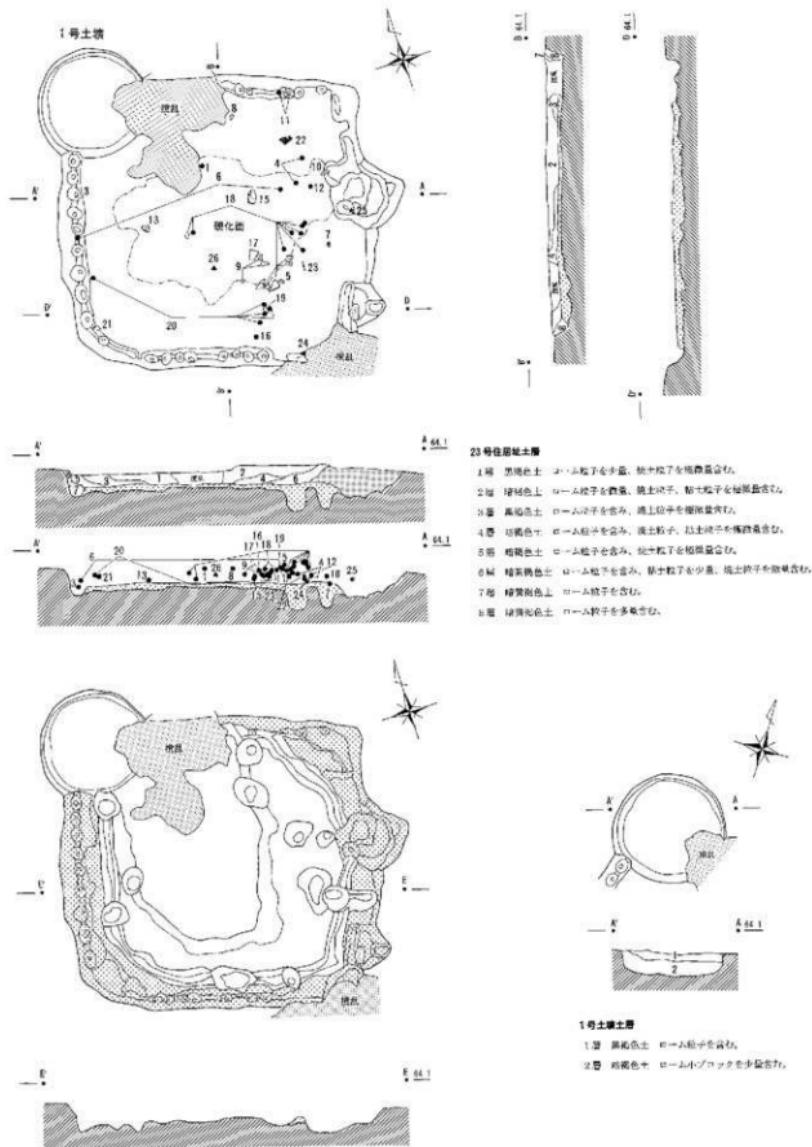
1、2は須恵器壺の底部の破片で、回転糸切り後外周部回転範削りを行っている。器内外面はロクロ水挽き整形を施している。1の器内面底部と体部の変換点には爪先技法がみられる。推定底径は1が7.3cm、2が9.2cmである。焼成は還元焰焼成である。1、2ともに胎土に白色針状物質を含んでいる。南北企窓跡である。

丸瓦（第32図3）

3の凸面は繩叩き後に範ナデ整形を施している。焼成は還元焰焼成である。

打製石斧（第32図4）

4は撥形を呈し、刃部を欠損する。自然面を多く残し、両側縁に調整剥離を施している。両側縁の一部に摩滅痕が認められる。石質は砂岩である。



第33図 23号住居址 1号土壤 (1/60)

4：23号住居址

調査区中央で検出した。北西側で1号土壙と重複している。新旧関係は23号住居址が古く、1号土壙が新しい。遺存状態は良好であるが、住居址北壁から床面中央にかけて一部搅乱が及んでいた。平面プランは方形を呈し、南北3.9m、東西3.55m、主軸方位はN-106°-Eを示す。壁は傾斜を持って立ち上がり、壁高は24cmをはかる。カマドは東壁に2基築かれている。北側が新しく、南側が古い。床面は関東ロームを3~30cm埋め戻して構築されている。床面はカマド部から住居中央にかけて硬化が認められた。周溝は幅12~18cm、深さ3~15cmの規模で巡っている。カマドのある東壁側は1度掘った周溝をカマド構築の際に埋め戻している。東壁を除く周溝底面には小ピットが約15cmの間隔で検出された。杭を打った可能性が高いと考えられる。

貼床を掘り下げる東壁側で焼土が検出され、カマドであることが確認された。このカマドから西側の住居址中心部が方形にやや深く掘り込まれ、掘り込みに沿って周溝が検出されたため、拡張前の住居址であることが判明した。

カマド

カマドは東壁に2基、貼床下から検出した拡張前の住居址東壁に1基築かれている。

1号カマド

東壁中央で検出した。遺存状態は良好である。新旧関係は2号カマドより新しい。両袖部には基礎で使用していたと思われる粘土の流れ込みが残っていた。平面プランは幅の広いU字状を呈し、壁外へ55cm掘り込んでいる。幅110cm、奥行き90cmをはかる。火床部は床面から20cm程度掘り込まれている。規模は幅50cm、奥行き45cmである。煙道は傾斜をもって立ち上がり、先端部で平坦部を持つ。煙道のローム面は非常に良く焼けて硬化していた。

2号カマド

東壁南側で検出した。遺存状態は火床部の一部に搅乱が認められるが良好である。新旧関係は1号カマドより古い。平面プランはU字状を呈し、壁外へ20cm掘り込んでいる。幅55cmをはかる。奥行きは1号カマド使用時の周溝が構築されており不明である。火床部は床面から5cm程度掘り込まれている。規模は幅40cm、奥行きは不明である。

煙道は傾斜をもって立ち上がり、先端部で深さ5cmほどの窪みを持つ。煙道の先端及び左壁のローム面は非常に良く焼けて硬化していた。

3号カマド

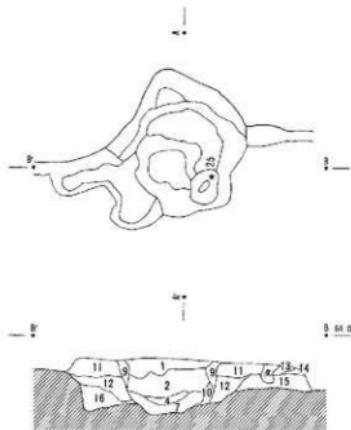
貼床下の拡張前住居址東壁中央で検出した。拡張時の床面構築により火床部、煙道の一部が残存していた。平面プランは不明である。残存する火床部は幅55cm、奥行き40cm、深さ15cmをはかる。火床部の一部ローム面は非常に良く焼けて硬化していた。

出土遺物

3は周溝、7は貼床下で検出したカマド、11は周溝上面、13、23は床面上から出土である。

蓋形土器（第37図1・図版8-1）

1は天井部の破片で、器内外面にロクロ水挽き整形を施し、擬宝珠状のつまみを有する。焼成は還元焰

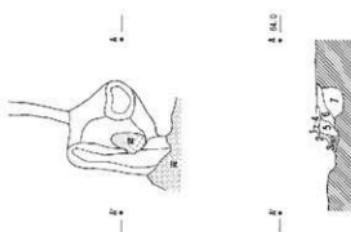


23号住居址1号カマド土器

- 1層 沖縄色土 粘土粒子を少度含む。
- 2層 黒褐色土 粘土粒子が少度、粘土粒子を多度含む。
- 3層 増築色土 黏土粒子、粘土粒子を含む。
- 4層 植生付色土 粘土粒子を含む。地上粒子を少度含む。
- 5層 沖縄色土 地下室。

第34図 23号住居址1号カマド(1/30)

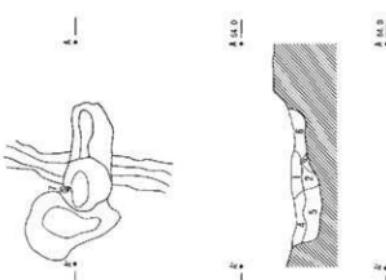
- 6層 球状褐色土 粘土粒子を多量、粘土粒子を含む。
- 7層 球状褐色土 褐熟したコーム粒子を含む。
- 8層 球状褐色土 ローム粒子を多量、粘土粒子を含む。
- 9層 球状褐色土 粘土粒子を含み、粘土粒子を多量含む。
- 10層 球状褐色土 粘土粒子を含む。
- 11層 球状褐色土 粘土粒子を含み、粘土粒子を多量含む。
- 12層 球状褐色土 粘土粒子を含み、粘土粒子を多量含む。
- 13層 球状褐色土 黏土粒子を少度、陶土粒子を多量含む。
- 14層 球状褐色土 ローム粒子を多量含む。
- 15層 球状褐色土 ローム粒子を含み、粘土粒子を多量含む。
- 16層 増築色土 ローム小ブロック、ローム粒子を含む。



第35図 23号住居址2号カマド(1/30)

2号カマド土器

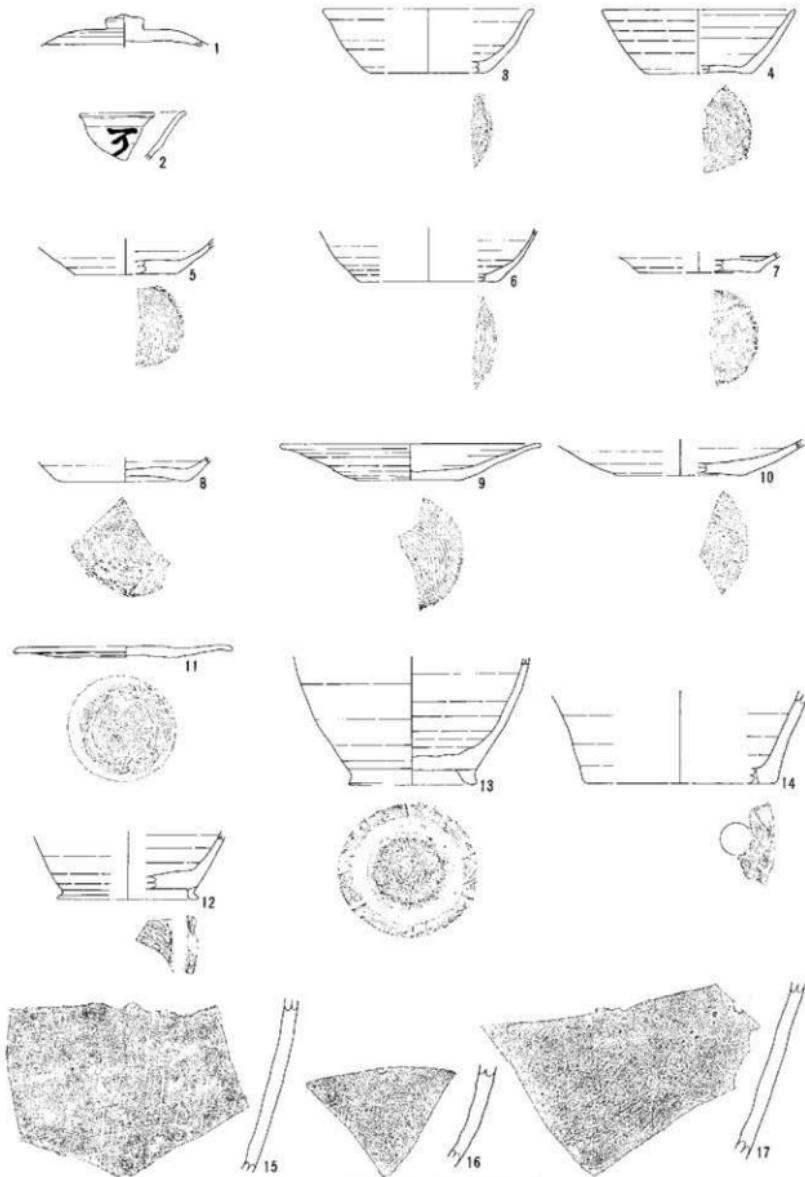
- 1層 球状褐色土 ローム粒子を含む、陶土粒子を多量含む。
- 2層 沖縄色土 ローム粒子を多量含む。
- 3層 球状褐色土 ローム粒子を含む。
- 4層 増築褐色土 ローム粒子を含む。
- 5層 増築褐色土 ローム粒子を多量、粘土粒子を少度含む。
- 6層 球状褐色土 ローム粒子を多量含む。
- 7層 球状褐色土 ローム粒子を多量含む。



第36図 23号住居址3号カマド(1/30)

3号カマド土器

- 1層 球状褐色土 陶土粒子を多量、ローム粒子を含む。
- 2層 球状褐色土 第二乾了、ローム粒子を含む。
- 3層 球状褐色土 褐熟したローム粒子を含む。
- 4層 増築褐色土 ローム小ブロックを含み、粘土粒子を多量含む。
- 5層 増築褐色土 ローム乾了を含む。
- 6層 球状褐色土 ローム粒子を含み、陶土粒子を多量含む。



第37图 23号住居址出土遗物（1）（1/3）

焼成である。

坏形土器（第37図2～8・図版8-3、4）

2は坏の口縁部から体部の破片である。器内外面にロクロ水挽き整形を施している。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。器外面に「万」と墨書きされている。焼成は半還元焰焼成である。胎土に白色針状物質を含んでいる。南比企窓跡産である。

3、4は口縁部から底部の破片である。底部は回転糸切りで、器内外面にはロクロ水挽き整形を施している。3は体部から緩やかに内彎し口縁部で僅かに外反する。4の体部は直線的に立ち上がる。3は推定口径13cm、推定底径7cm、推定内底径7cm、器高3.9cm、4は推定口径11.3cm、推定底径6.3cm、推定内底径5.6cm、器高4.3cmである。焼成は3が還元焰焼成、4が酸化焰焼成である。5～8は体部から底部の破片である。底部は回転糸切りで、器内外面にはロクロ水挽き整形を施している。5、6の体部は緩やかに内彎している。焼成は5が酸化焰焼成、6、7が還元焰焼成、8が半還元焰焼成である。

皿形土器（第37図9、10・図版8-9）

底部の調整は回転糸切りで、9の体部は直線的に、10の体部は緩やかに内彎し口縁部で僅かに外反する。9は推定口径16.1cm、推定底径6.5cm、器高2.3cm、10は推定底径6.3cmである。焼成は9が還元焰焼成、10が半還元焰焼成である。

高台付皿形土器（第37図11・図版8-11）

底部の調整は回転糸切りで、器内外面にはロクロ水挽き整形を施している。底部に高台を貼り付けた痕跡が残っている。体部は扁平で、直線的に口縁部へ至る。口径13.3cm、底径5.4cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。

壺形土器（第37図12、13・図版8-13）

12は胴部下端から底部にかけての破片で、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。底部は回転糸切りで、高台を貼り付けている。推定高台径8.6cm、高台高0.6cmをはかる。焼成は半還元焰焼成である。

13は胴部下半から底部の破片である。底部は回転糸切りで、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。底部には高台を貼り付けている。高台径7.8cm、高台高0.9cmをはかる。焼成は還元焰焼成である。

瓶形土器（第37図14）

14は胴部下端から底部の破片で、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。底部に孔が配置されるタイプである。孔の径は1.3cm程度で、外から内に穿たれている。焼成は半還元焰焼成である。胎土に白色針状物質を含んでいる。南比企窓跡産である。

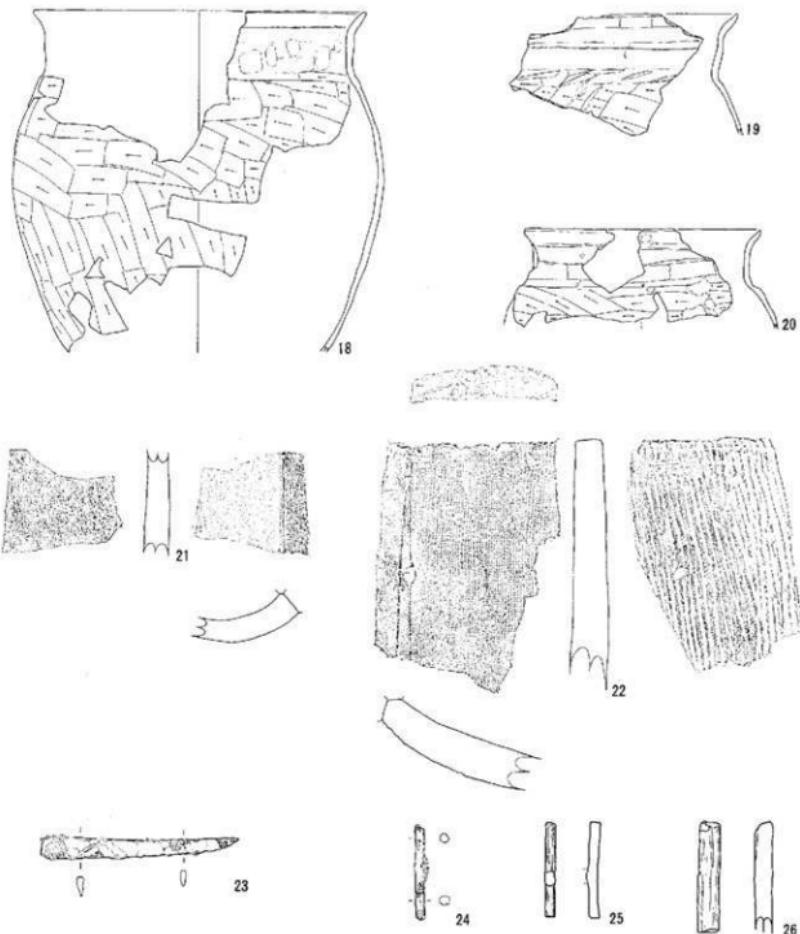
斐形土器（第37図15～17・第38図18、19・図版8-18）

15～17は須恵器の胴部破片で、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。17の器外面は格子状の叩きを施し、器内面にはロクロ水挽き整形前の當て具痕が残っている。15の胎土には白色針状物質を含んでいる。南比企窓跡産である。焼成は15、17が還元焰焼成、16が酸化焰焼成である。

18、19は土師器の壺である。口縁部は器内外面に横ナデを施し、胴部器外面上半部は横方向の窪削りを行っている。18の胴部中位から下半は斜め方向及び縦方向の窪削りを行っている。口縁部は外反し、頸部はコの字状を呈する。18の推定口径は20.3cmである。

台付斐形土器（第38図20）

口縁部は器内外面に横ナデを施している。頸部は直立し、口縁部は外反する。胴部器外面上半部は横及び斜め



第38図 23号住居址出土遺物（2）(1/3) 但し、24～26は(2/3)



第39図 1号土壙出土遺物 (1/3)

方向の範削りを行っている。推定口径は14.4cmである。

丸瓦（第38図21）

21の凸面は継位の範ナデ整形を行っている。側面及び凹面端部は範削りを施している。焼成は還元焰焼成である。

平瓦（第38図22・図版8-22）

22の凹面には布目痕を有し、範ナデを行っている。側面、端面及び凹面端部には範削りを施している。焼成は半還元焰焼成である。

鉄製品（第38図23、24・図版8-23）

23は茎を欠損する刀子の破片である。残存長12.1cm、身幅は1.4cmをはかる。24は頭部と先端部を欠損する釘である。断面は方形を呈する。

銅製品（第38図25・図版8-25）

25は残存長2.9cm、径0.3cmの円柱形を呈する。用途は不明である。

石製品（第38図26・図版8-26）

26は断面楕円形の円柱形を呈する。全体に継位の磨きを施している。径は0.7cmをはかる。頭部は平坦に磨かれ、縦方向に細い切り込みを有している。石質は石灰岩である。用途は不明である。

5：1号土壌

調査区中央で検出した本土壌は、23号住居址と重複していた。新旧関係は土壌が新しく、23号住居址が古い。一部に搅乱を受けていたが遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、規模は径1.35m、深さ32cmをはかる。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物

蓋形土器（第39図1）

1は天井部の破片で、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。緩やかな天井部から大きく内擣し、口縁部に至る。焼成は還元焰焼成である。

坏形土器（第39図2）

2は坏の体部から底部の破片である。底部は回転糸切りで、器内外面にロクロ水挽き整形を施している。体部はやや内擣しながら立ち上がる。焼成は還元焰焼成である。

若宮遺跡45次調査



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



21号住居址



21号住居址カマド



22号住居址遺物出土状況（1）



22号住居址遺物出土状況（2）



22号住居址



22号住居址貼床下

図版2

若宮遺跡45次調査



22号住居址カマド



23号住居址炭化材出土状況



23号住居址



23号住居址カマド遺物出土状況（1）



23号住居址カマド遺物出土状況（2）



23号住居址カマド



24号住居址



24号住居址カマド

若宮遺跡45次調査



25号住居址（1）



25号住居址 1号カマド出土状況



25号住居址 1号カマド



25号住居址（2）



25号住居址 2号カマド



25号住居址（3）



25号住居址 3号カマド



25号住居址 貼床下

圖版4

若宮遺跡45次調査



21号住居址出土遺物



22号住居址出土遺物（1）

若宮遺跡45次調査



22号住居址出土遺物（2）



23号住居址出土遺物（1）

圖版6

若宮遺跡45次調査



23号住居址出土遺物（2）



24号住居址出土遺物



25号住居址出土遺物

古道遺跡14次調査



23号住居址遺物出土状況（1）



23号住居址遺物出土状況（2）



23号住居址



23号住居址 1号カマド



23号住居址 2号カマド



23号住居址 3号カマド



1号土壙



14次調査区全景

圖版8

古道遺跡14次調查



23號住居址出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	わかみや ふるみち							
書名	若宮 -45次調査- 古道 -14次調査-							
副書名								
卷次								
シリーズ名	日高市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	松本尚也・早川修司							
編集機関	日高市教育委員会							
所在地	〒350-1292 埼玉県日高市大字南平沢1020 TEL042-989-2111							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯 (°・') 通路番号	東経 (°・') 41秒	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
若宮遺跡	埼玉県日高市 大字高萩 字中丸	242	132	35度 53分 41秒	139度 22分 14秒	2013.04.24 ～2013.08.09	379.39	個人住宅
古道遺跡	埼玉県日高市 大字高萩 字乙別所前	242	123	35度 54分 03秒	139度 22分 00秒	2014.05.01 ～2014.05.20	377	個人住宅
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
若宮遺跡 (45次調査)	集落跡 寺院跡	奈良・平安	住居址 土壤	5軒 3基	須恵器 壺、甕 土師器 壺、甕 鉄製品 刀子、釘、錆	遺跡東端の傾斜地で 遺構の分布が確認できた。		
古道遺跡 (14次調査)	集落跡	奈良・平安	住居址 土壤	1軒 1基	須恵器 壺、甕、瓶 土師器 壺、甕 鉄製品 刀子、釘	遺跡の西端で住居址 が確認できた。		

日高市埋蔵文化財調査報告書 第37集

若宮

-45次調査-

古道

-14次調査-

発行日 平成29年3月31日

編集兼
発行者 日高市教育委員会

印刷所 株式会社文化新聞社

発行所 日高市教育委員会
埼玉県日高市大字南平沢1020
